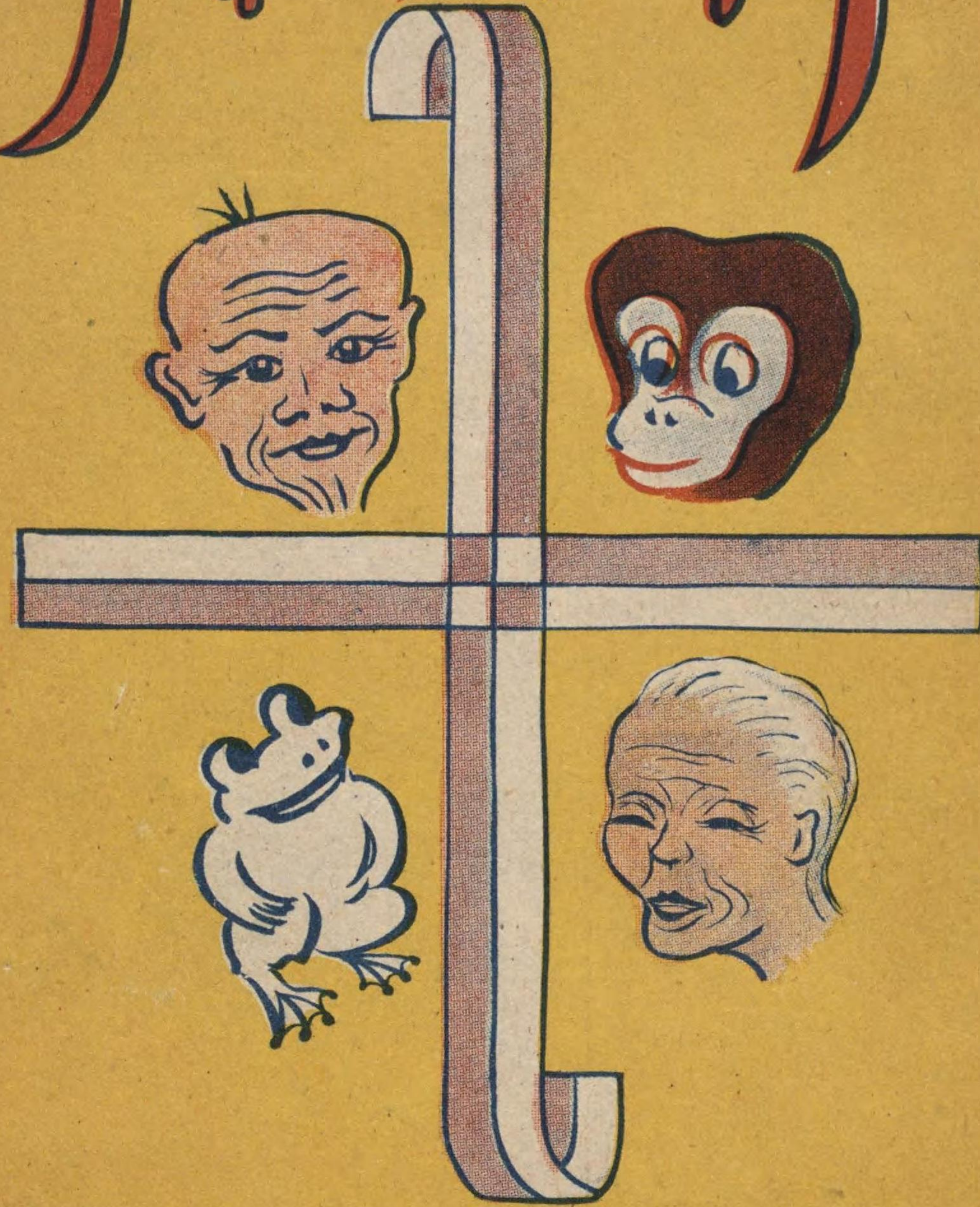
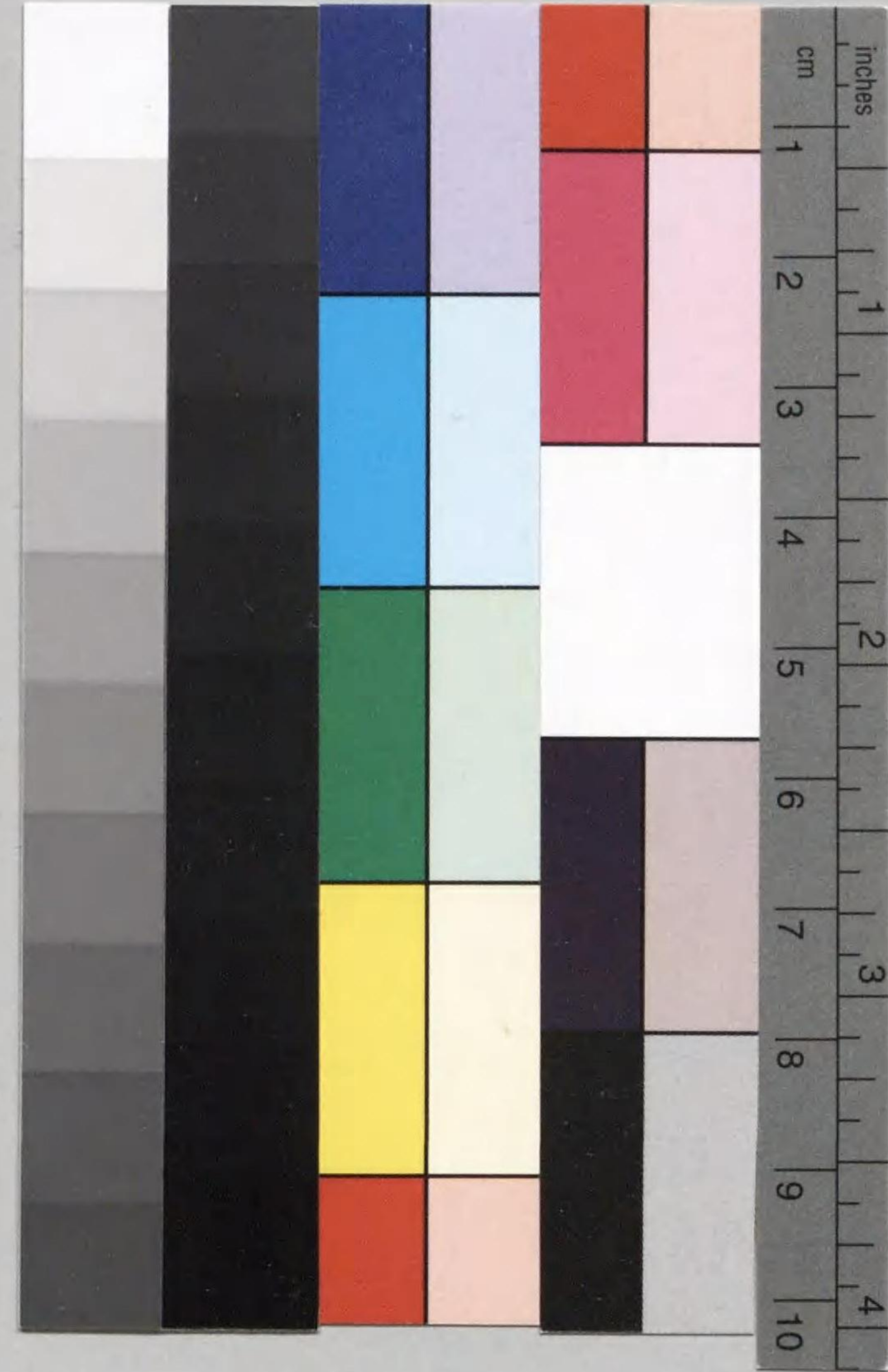


ユーモア童話  
川ねうね

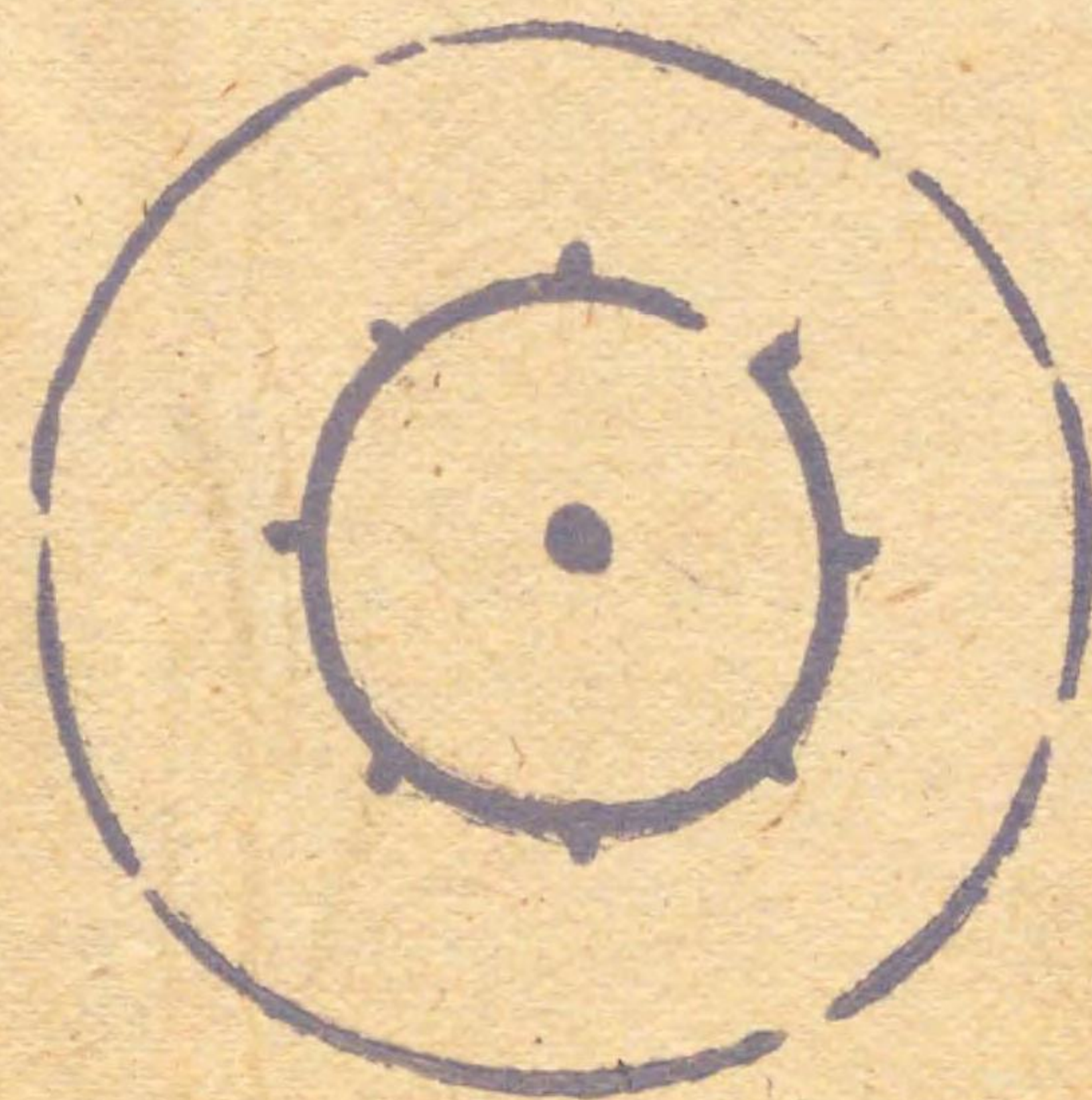
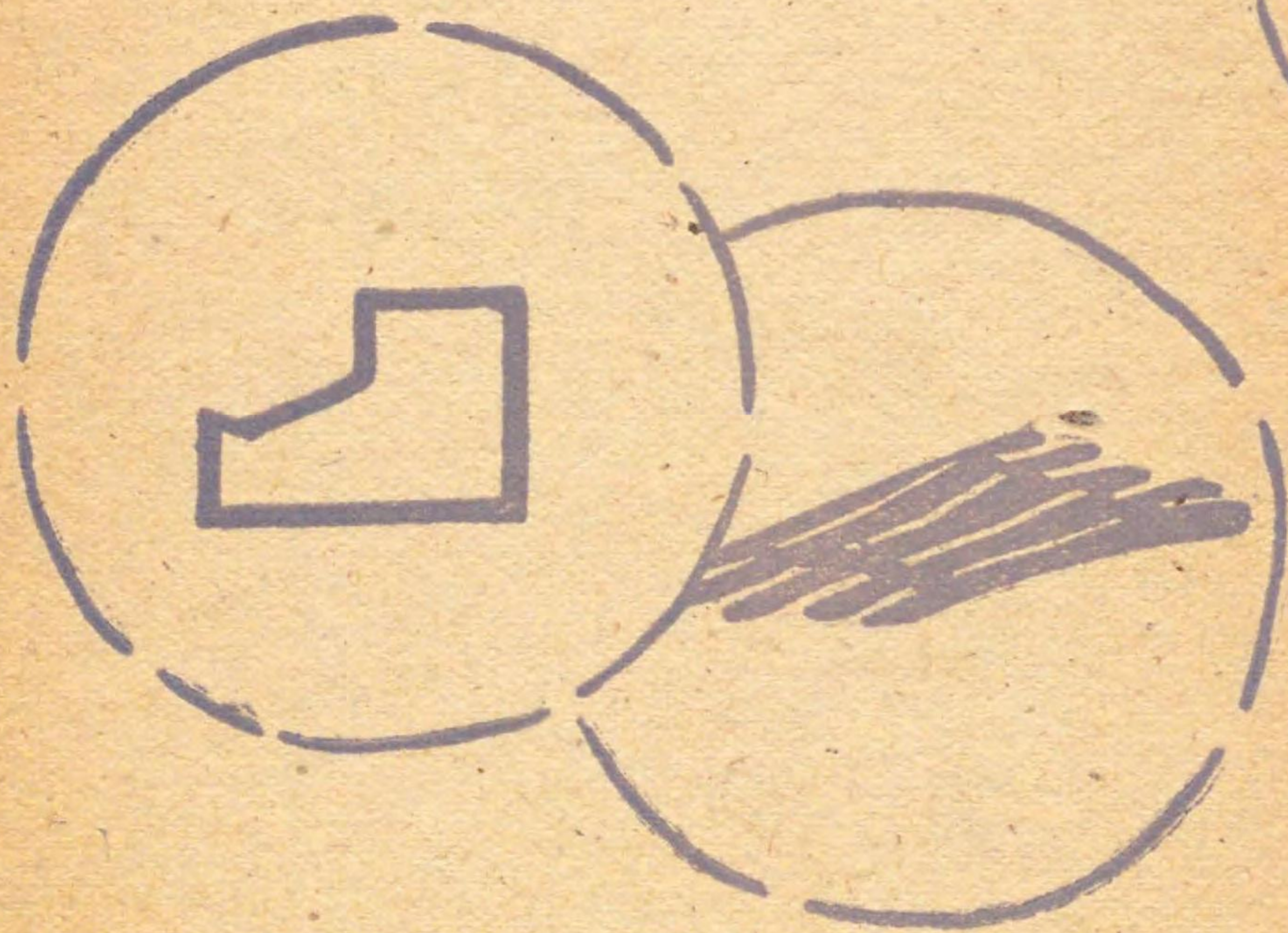
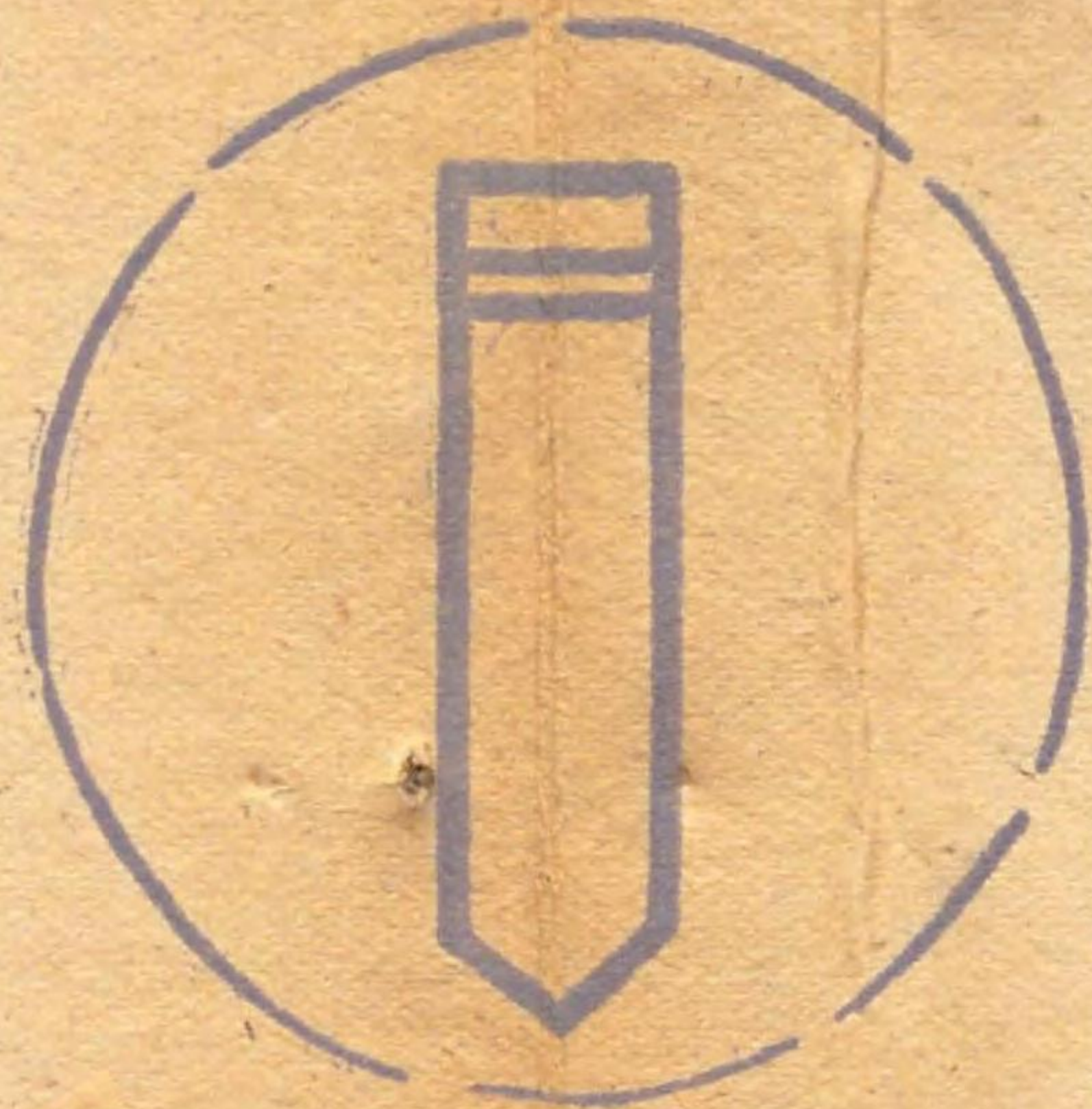
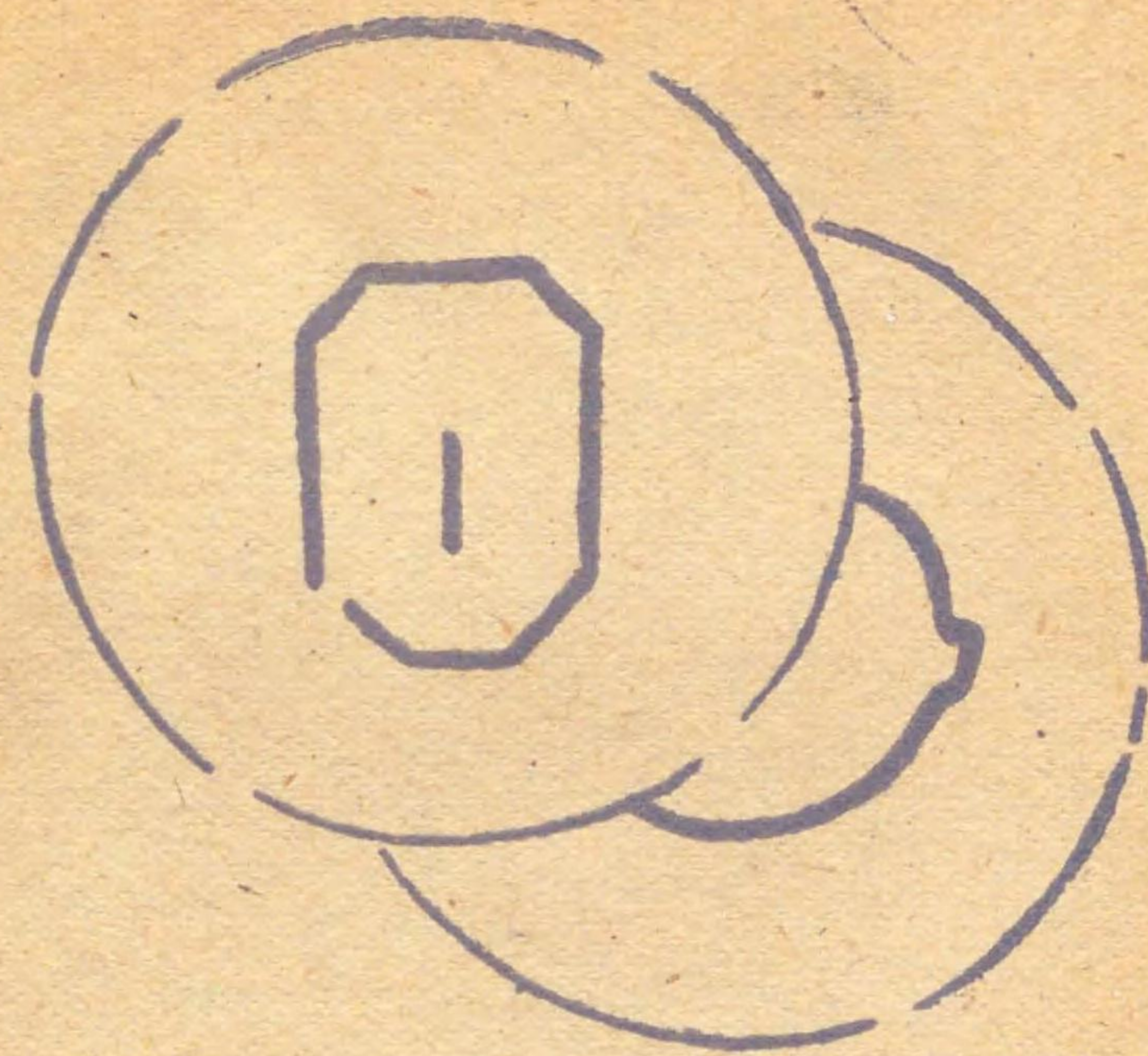
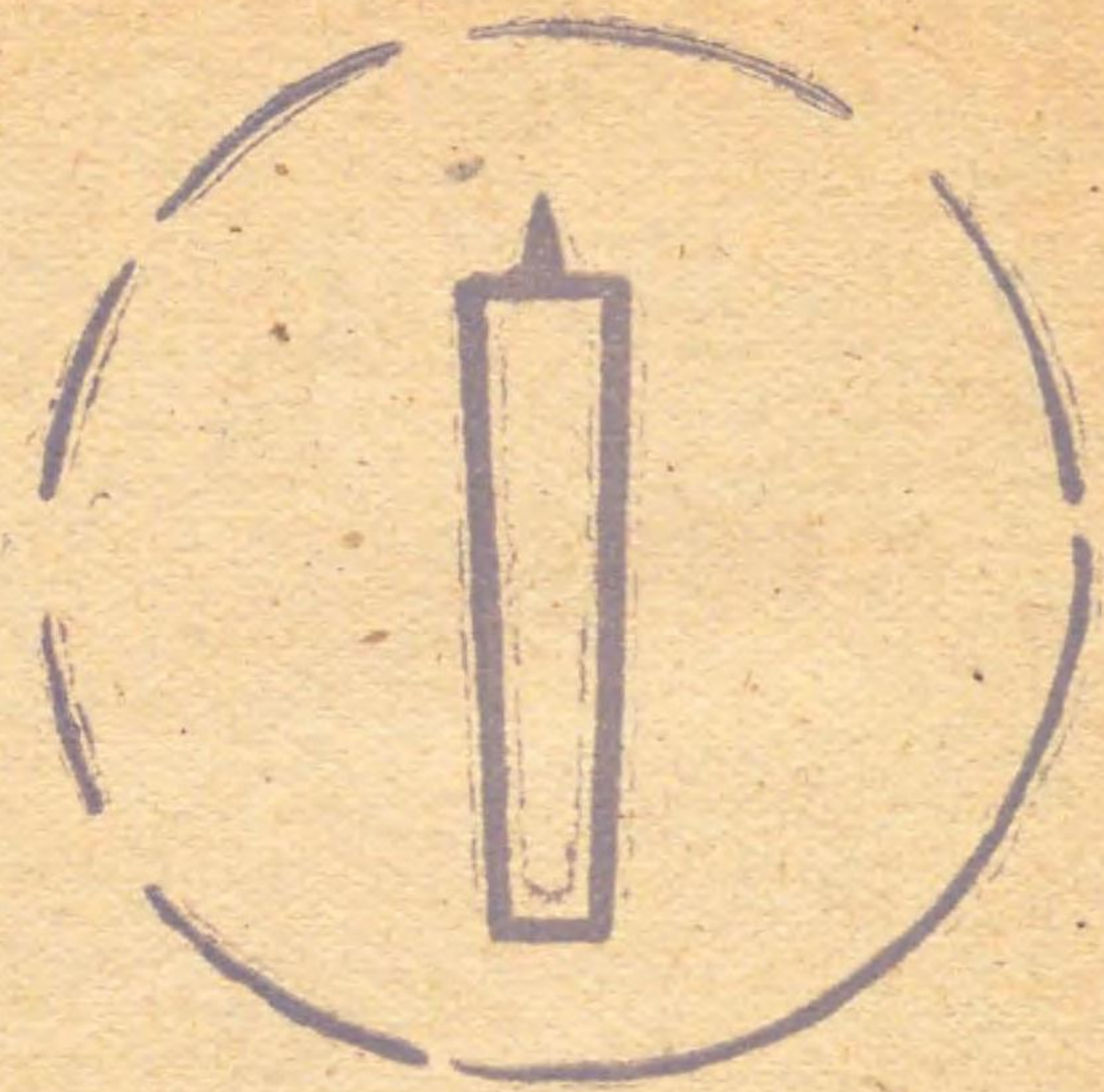


著 子 晶 野 謝 與

児  
4  
Y-









與謝野晶子著

う  
ね  
う  
ね  
川

采  
花  
書  
房



48  
Y-11



814668

奥山おくやまのうねうね川のみなかに住すんでいるお爺さんとお婆さんは、分ぶん家をけさせてあるむすこ達たちの家を訪問ほうもんしようと思おもいまして、船ふねに乗のって出でました。うねうね川を下くだって行くのであることは云いうまでもありません。

「わしらはずい分ぶん久ひさしい間かんどこへも出でなかつたものだなあ。」

お爺さんは川の水と同じように澄すみんだ空を眺ながめてここう云いいました。

「そうですね、お爺さん、まあ何年ぶりでしょうかねえ。」

お婆さんも兩岸りょうがんの樹立じゆりつをとみここうみしながらここう云いっていました。

「何年になるかなあ。」

二人は同じように首くびをかたむけていました。

「お爺さん、七八百年ほどでしょうかねえ。」



「とんでもない、七八百年前と云うのはあの三番目のむすこを分家させた時分だよ。」

「ほう、そうですね、では千年もたちますかえ。」

「何を云うのだ、千年前にはわしが曳いて歸つた赤松のなえを、お婆さんは鼠の子のような色だと云つたりしながら門へ植えたぢやないか。」

「ほう、そう、そう。」

とお婆さんはおかしそうに笑いました。そして俄に氣になり出したように伸び上つて後を見返るのでした。

「どうしたのだ。お婆さん。」

とお爺さんは云いました。

「なあに門の赤松が見えるかと思つたのですよ。」

「赤松はちゃんとあすこに立っているぢやないか。」

お爺さんはお婆さんの見ているのとは別な方に高く高く立っている松の木を指さして見せました。

「いつのまに、あんな方へ行つたのでしよう。」

と笑いながらもお婆さんはなつかしそうにそのかさのような形をした松に見入っていました。

「うねうね川もまだまだ曲り角にはならないのだがなあ、船に乗るとえて方角はこうなるものだよ。」

「お爺さん、昔の鼠の赤ん坊がまるでさんごのような色に見えますねえ。」

赤松のみきには朝日がさしていました。

「しかしお婆さん、わしにも自分の年は細いところまでは解らないよ。」

「まあよう御座んすよ、お爺さん、むすこの家へでも行つてゆつくり考



えるとしましよ。

「ああ、そうしよ。」

二人はうなぎ合っていました。

「お爺さん、うっかりとしましたねえ。」

不意にお婆さんはこう云いました。

「何がだえ。」

「私らはね、お爺さん、喜作の家へ何かみやげを持って行くのに気がつきませんでしたよ。」

「ああ、うっかりとしたねえ。」

「こまつたことねえ。」

お婆さんはあきらめが悪いのでした。

川のはばが少しせまくなつて二人の乗った船は岸の岩とかなりすれす

れになつて下つて行くのでした。

びよこんと船の中へちいさい青がえるの子が一ぴきとびこみました。

「おやあつ。」

とお婆さんは大聲を立てました。

「お婆さん、しつかりとしないぢやいけない。これはな、お婆さん。」

「何ですか、お爺さん、それは。」

「わしは名を忘れたがな、こわい物ではない、たしかに。」

かえるは手を突いてお爺さんとお婆さんの顔をめずらしそうに眺めまわるのでした。お婆さんもそのうちこわくなくなつて來た風です。

「名をおぼえていないのですか、お爺さん。」

「今のところ一寸わからないよ。お婆さんは見おぼえがないかえ。」

「ええ、見おぼえはないでもないようですがねえ、しかし昔見たのとは



色がどうも少しちがうようですよ。」

「これは青いねえ。」

「いい色ですねえ。」

「きつと上等なんだらうよ、ところでお婆さん、物は相だんだがねえ、これを喜作の家へみやげに持って行つたらどうだらう。」  
とお爺さんは云いました。

「ええ、それが上分別ですねえ。」

お婆さんはうれしそうに手を叩きました。お爺さんはふところから紙を出して青がえるを包んでたもとへ入れました。

ひるになりましたので、ふくろからべんとろを出して二人は食べました。

「ずい分いいけしきですねえ。」

みやげ物が決つてからはお婆さんは一そう浮々した気分になつていました。

「むすこ達は皆よろこぶだらうなあ。」

お爺さんはこんなことを云つてました。

「何と云つても喜作は長男ですから先方の思いもちがうでしょう。」

お爺さんはたいくつなものですから、たもとから青がえるの紙ずつみを出して見ました。

「お爺さん、どうするのですか。」

「お婆さん、おれはこの生物に少しげいを仕込んでやろうと思うのだよ。」

「そうですね、げいのありなしで大そうねうちがちがいますからね。」

「何を先づ仕込んでやろうかな。」



お爺さんは大切そうに青がえるをてのひらへのせていました。

「おどりをおしえて見ようかな。」

「あ、それがよい。」

「おまえや、おどりをけいこするのだよ。」

お爺さんはかえるの名を知らないものですからこう呼んでいるのでした。

「お爺さん、手本を見せてやらなければいけませんよ。」

「でもわしがおどれば船がひっくりかえるよ。」

「ええ、そうですね。」

「なあに、おまえや、わけはないよ、そら、びよいびよいと飛んだりはねたり。」

かえるはてのひらから船そこへびよいと飛びおりました。それから

止む間なしに飛んだりはねたりをつづけていました。

「やあ、飛んだり、はねたり。ずい分うまい物だねえ、お婆さん。」

「感心ですね。」

「からだがもう少し大きいといい役者だがなあ。」

「そうですね、みやげにつれて行くにしても、もう少し大きい方がいいんですかね。」

二人は残念そうに青がえるを眺めていました。

「ねえ、お婆さん、この生物は皮にいつばいしわがあるがねえ、見なさい、そら、ねえ、だから何かで息を入れたらもう少しは大きくなるだろう。」

「ぢやあそれで息をお入れなさい。」

お婆さんはさつきべんとうの時にはしの代りにしたよしの細いのお



爺さんに渡わたしました。お爺さんはさつそく青がえるのおなかへ息を入れました。かえるは見る見る少しふくれました。しかしふぐ程ほどにはしませんでした。おどるのに差さしつかえると気がついたからです。

「これでいい福ふくそうになつたねえ、お婆さん。」

「なりましたとも。」

お爺さんはまたかえるを紙つに包つんでたもとへ入れました。

川の流ながれがややゆるくなって来たかと思ひますと、うねうね川の第一の曲り角の一番むすこの分家している土地が見えて来ました。

「やれ、やれ着ついた。」

「どつこいしよ。」

二人は船を白楊はくようの木につないで陸おかへ上りました。もう日の暮くれでした。しかし喜作を分家させる時にお爺さんの渡わたしたはたが屋根やねのまん中に立

っていましたから、むすこの家を見つけるのには別べつだん骨ほねが折おれませんでした。

「ごめん下さい。」

へんぢはなく家の中のにぎやかな人のさざめき聲こゑばかりがお爺さんとお婆さんとにのぼせさせる程に聞えるのでした。

「何があるのだろう。」

「笑わらってますから、いづれいいことにちがいありませんよお爺さん。人の死しんだりしたようなことぢやありませんよ。」

「は、は、は、人が死ぬ、昔むかしばなしではあるまいし、人がそう死んでなるものか。」

二人がこんなことを云っています所へ喜作が顔を出しました。

「どうもそんな気がしたのです。お父さんとお母さんがいらつしやつて



下さる氣がしましたのです。さあお通りなさい。こんなうれしいことはありません。」

と喜作は心のそこから出たような聲で云いました。

「長くあわなかつたが、かわりはないかえ。」とお爺さんはたずねました。

「うかがおう、うかがおうと思つていますうちに百年や二百年は直ぐたつものですからね。しかしほんとうに好いところへ来て下さいました。今晚は一寸祝いひい事がありましたして客が集つて居るのです。おつかれてなぐば直ぐお客さまの方へいらつしやい。」

「ああ、そうしましょう、一たい何のお祝いひいだえ。」

「くらを二つだけたてた祝いひいです。」

「それは好かつたねえ。」

老人達はむすこにみちびかれて宴えんせき席へ行きました。

五六百歳から七八百、千、千二三百、千五百六百と云ふ程の年ごろの人が集つて居るところでも、さすがにみなかみの二人に越す高れい者はありませんからお爺さんとお婆さんは誰からもそん敬けいを拂はわれました。

「ごちそうをいただいた上に喜作君のご両親にお目にかかれてこんなうれしい事はごわせんわい。」

口くちききらしい一人の男がこう云いました。

「しかしこの上のぜいたくを云わせてもらうと、何か餘よきようを見せてほしいものですな。」

と云ふのは少し酒さけのよいの廻まわつた人なのです。

「餘よきようにはどうぞ御主人御自身のお手なみを拜見はいけんしたいものですな。」



と云う人もありました。

「御じようだんを。私に何が出来るものですか。」

喜作はこう云っているのですが、もともと酒によつた人たちばかりですから、是非是非などと喜作の手を取らんばかりにして藝を見せよと云ふのでした。

「一寸用があるから来てくれ。」

と云いまして、お爺さんは別間へ喜作をつれて行きました。

「さつそくだがね、わしはみやげのつもりで役者をつれて來ているからこれをおまえの身代りにしなさい。よくおどるよ。」

とお爺さんは云いまして、青がえるをたもとの紙包みから出しました。

「へえ、こんなものですか。」

喜作はお爺さんの顔と青がえるを見くらべてこう云いました。

「さあおどるのだよ。おまえや。さあ、飛んだり。そうら、飛んだり、はねたり。」

かえるは今まできうくつて仕方がなかつた後ですから嬉しがつていきおいよくぴよこぴよことおどりました。

「どうだい、喜作。」

「なるほど。」

喜作は云いました。

「皆がおもしろがるだろう。」

「ところで、この役者の名は何と云うのですか、お父さん。」

「さあ、それはわからない。」

「名があるといいのだがなあ。」

と喜作はひとりごとのように云っていました。」



「一度よく聞いて見よう。」

お爺さんはかえるをてのひらへのせて、

「おまえや、名があれば云つてごらん。」

と云いました。かえるはのどをごろごろと云わせました。

「わかつたよ、喜作。」

「何と云いますか。」

「五郎だつてさ。」

「なるほど、それは好い名だ。」

喜作はたび役者の五郎をしようかいたしますと云ひまして、ざしきへ青がえるをつれて行きました。

「さあ、五郎さん、飛んだり、はねたり。」

とお爺さんは拍子ひょうしを取る役やくをしていました。かえるはたくさんにとも

つた灯あかりをうれしそくに眺ながめながら盛さかんにおどりました。しまひには客の方かたでも、

「やあ、飛んだり、はねたり。」

「五郎さん、飛んだり、はねたり。」

などとおぼえて云つていました。

祝ひ日のあと二三日をお爺さんとお婆さんは喜作の家にたい留りゅうしていましたが、いよいよ今日は立つて次男しんないの新平しんぺいの家へ行こうとするのでした。

「あんなめずらしいみやげを持って来て下さいましたのに、何もようおむくいすることが出来ないのは残念ざんねんで仕方がありません。」

と喜作は云つていました。

「そんなことはないよ、喜作。」



喜作は座を立ちまして次の室から平たい紙包みの物を持って來ました。

「これは人から祝にもらったのですが、これでも差し上げましょう。」と喜作は云いました。

「そんな物をもらつてはすみませんねえ、お婆さん。」お爺さんは氣ずらそうにこう云つてました。

「まあそれでも喜作のころざしだからもらつて行こう。」とお婆さんは云つてました。

お爺さんとお婆さんの船が出ます時には酒えんの時に集つただけの人は皆岸べへ見送りに來ていました。

「お爺さん、お婆さん、ばんばんざい。」

「ばん、ばん、ざあい。」

と皆は云いました。この人たちに取つてはばんざいとは餘りに近いことに聞えますので皆ばんばんざいと云つて人を祝うのでした。

「餘り人の多い所にいるとつかれるものだね、お婆さん。」船でお爺さんはこんなことを云つてました。

「そうですね、まあ二日や三日だからいいようなものの、とても千年も二千年もあした所では暮せません。」

とお婆さんも云いました。

「新平は幾歳くらいになつてゐるだろう。」

「さあ、よくは解りませんが八九百でしょうか。」

とお婆さんは首をかたげて云つていました。

「あの喜作のくれた物は何だろう。」

「開けて見ましようかね。」



二千何百歳かのお婆さんの指の先で解かれる紙包みはばさばさと鳴りました。

「ねえお婆さん、新平の家へは何をみやげにやったものでしょう。」

お婆さんは思ひ出したようにこう云いました。

「まあそんなに心配をしなくてもいいさ。」

「あなたには新平が喜作ほどに可愛くないのですか。」

お婆さんは包みを解くのも止めてしまいました。

「なあに、そうぢやないがね、みやげ物なんかはまた船へ飛びこんで来るかも知れんと思つてゐるからさ。」

「あんなことはまたあることぢやありませんよ、お婆さん。それに新平は喜作のような陽氣なことがきらいですから役者なんかはつれて行けませんよ。」

「それはそうだ。」

「お爺さん、この包みの中に新平の氣に合うような物があるかも知れませんかよ。」

またばさばさと紙が鳴りました。中から出て來ましたのは、はばの廣い板こんぶのたたんだ物でした。

「へええ、こんなもの、お爺さん。」

「なあんだ。」

二人は手に取つて見たり、下へおいて横からのぞいて見たりいろいろとしました。

「革だねえ。」

とお爺さんが云いました。

「なるほど、そう、そう。」



「何の革かわだろう。」

「いい皮かわですわえ。」

お爺さんは昆布こんぶのはしを持って船の中へ立ち上りました。長さは八九尺の物でした。

「ずい分大きいけもの皮だねえ。」

「そのわりに細ほそいことを思うとお爺さん、これは大蛇だいぢやの皮ぢやないかしら。」

お婆さんは氣味きみが悪わるるそうに少しからだを後へ引いていました。

「何を馬鹿なことを云うのか、おまえこれにはうろこがないぢやないかうろこが。」

お爺さんが振ふるので昆布はばたばたと音を立てていました。

「そうですわえ。」

「そうとも。」

お爺さんはまた船ぞこへすわりました。

「お婆さんや、これは海のけものかも知れないよ。わしは昔一度うねうね川を下つて海へ出ようとしたことがあるわえ。もう少して海と云ふ時に何番目かのむすこが、家うちに一寸用が出来たと云つてむかえに來たわえ、その時に一寸かいだ海風うみかせのにおいがするようだよ。」

とお爺さんは云いました。

「海つてこんなにおいのする物ですかねえ。」

お婆さんははなを昆布こんぶのそばへ持つて行きまして感心したように云つていました。

「お婆さん、これはくぢらの皮だよ。何のことだ、くぢらの皮が解わからなかつた。」



と云つてお爺さんは笑つていました。

「くぢらつて云ふ物は私も話で知つてますよ。」

二人はまたしばらくのあいだ昆布を眺めていました。

「で、これを新平にやりましたら新平は何にするでしょう。」

「さあ、何にするだろう。」

「新平の家には子供があると云ふことですから。」

「ふん、ふん。」

「私はこれでくつをぬつて行つてやりましょう。」

「それが一等だね。」

とお爺さんは云いました。お婆さんは俄かにいそがしいからだになつたと云うように、しんげんぶくろから、はさみや糸や針を出しました。

昆布を切りはなすのはお婆さんの引いた白ぼくのすぢへお爺さんがはさ

みを立てたのでした。

「いい皮にはちがないけれど、ちよいちよ横ざけなんかがしますね。」

お婆さんは昆布のくつをぬいながらこんなことを云つてました。そこなどは何ぢうにも昆布を重ねましたので、出来上つたのはわずか二足だけの子供ぐつでした。お婆さんは黒ちりめんのしごきのはしをさいてひもにしました。

「お婆さん、そのかびのようなものは水でぬらしてふいて置くがいいね。」

とお爺さんは注意をしていました。

「お爺さん、新平はあいかわらずさびしいくらしをしているのでしょうね、喜作なんかとはちがつて。」



お婆さんはこんなことを云い出しました。

「でも子供があると云うぢやないか。」

「なあにね、さびしいと云うのは貧<sup>びん</sup>ぼうが好<sup>す</sup>きなしよう分<sup>ぶん</sup>を云うのですよ。」

「なまけて貧<sup>びん</sup>ぼうをするのぢやなし、人だすけに自身の物をまきちらしてああしている新平には喜作が金もうけをするのと同じまん足<sup>ぞく</sup>があるのだよ。」

「それはそうでしようね。」

流れはもうそろそろゆるくなつて來ました。うねうね川の第二の曲<sup>まが</sup>りかどへ近づいて來たのです。

「ああ、やつぱし夕方になつた。」

お爺さんは一つ出た星<sup>ほし</sup>を見上げてこう云いました。

「それに川から少し道のりがあるそうですから急<sup>いそ</sup>ぎましようよ。」

二人はつないだ船の方は見返りもせずに包みをさげたまま岩<sup>いわ</sup>の道<sup>みち</sup>を人家のある方へ傳<sup>つた</sup>つて行くのでした。

「いたい、いたい、いたあい、兄さん。」

と云ふ聲がして、つずいて女の子の泣<sup>な</sup>くのがお爺さんとお婆さんの耳に入りました。

「お父様、お母様。」

今度のは男の子の聲です。老人達は小ざさを分<sup>わ</sup>けてその聲のする所へ行きました。

「久ちやん、誰<sup>だ</sup>か來たから泣<sup>な</sup>かないでお置<sup>お</sup>き、笑<sup>わ</sup>れるから。」

と男の子は妹<sup>いもうと</sup>に云つてました。

「だって、だっていたくつて歩<sup>あ</sup>けないんだもの。」



二人はかわいいよく似た顔の兄妹きょうだいでした。お爺さんは思わず妹いもうとの手を取った男の子の頭かしらをなで、お婆さんは女の子のもう一つの手を取りました。

「どうしたの、坊ぼくは。」

「泣かないでお置きなさい、ちようちゃん。」

兄弟は半なかばおそれた風ふうで老人達を眺ながめていました。

「あの、この久ちやんと云ふ妹が川へぞうりを落したの、僕が取つてやろうと思つてね、また自分のもなくなしたの、そしたら足がいたくつて二人とも歩けないの。」

「そうだらうなあ。」

「もういい、私がちようちゃんをおんぶして上げよう。坊ぼくはお爺さんにおんぶしておもらいなさい。」

お婆さんは涙なみだをこぼしながら云いました。

「お婆さん、それよりもさつきさつきのくつを出してはかせたらいいぢやないか。おんぶして岩いわからすべつたらそれこそ大へんだ。」

「そうでしたね。」

二人の子供の足は老人たちの手ぬぐいでふかれました。昆布こんぶのくつはしつくりと四つの足を包みました。

「さあ歩いてごらん。」

「よく似合にあうよ。」

老人たちも子供らもうれしそうな顔をしました。

「さあ、急いそいで送おくつて上げよう。」

と云うお爺さんにりこらしい男の子は、

「あなたはどこへ行くのですか。」



とたずねました。

「私の行く家かえ、それは新平と云う人の家だよ。」

「そう、それでは僕の家なんです、僕や久ちゃんのお父様が新平ですよ。」

「まあそうかえ、それでは私たちの孫さんです、お爺さん。」

「うれしい、うれしい。」

「うれしい、うれしい。」

「うれしい、うれしい。」

「うれしい、うれしい。」

四人はこう云いつづけて新平の家へまで着きました。新平は両親をどんなによろこんでむかえたか知れません。子供らは何よりも昆布のくつを親たちに見せました。

お爺さんとお婆さんはまた二三日の後に新平の家を立つて行こうとしました。

「残念に思いますが、それではまあ旅行をしていらつしゃい。」

と新平は云っていました。

「せめて二百年はおいで下さるといいのですがねえ。」

とその妻も云っていました。

「私はおばあさんにいただいたくつを大切に千年も持たせますわ。」  
と久ちゃんは云っていました。

「ところで何かせんべつをさし上げたいのです。」

と新平は云いました。

「何もいらないよ、何もいらないよ。」

とお婆さんは手をふりました。



「そんな心ばいはしないでいいよ。いり用なもののある時にはびよこ  
なんと船へ飛び込んで来るからな。」

お爺さんはこんな獨がてんなことを云つてました。

「でも、こころざしのしるしだけはさせていたいただきたいものですよ。」

と新平は云いました。

「ではね、この家で一番不用な物一つだけもらつて行きましょう、ねえ

お爺さん。」

「それが一番だ。」

とお爺さんは云いました。

「ぢやあお船へ何かをつんで置くとしよう。」と新平は妻に云つてまし  
た。

お爺さんとお婆さんの船が岸を離れます時にばんばんざいとはやす人

は一人もありませんでしたが、見送っている大人二人と子供二人の目は  
いつぱいの涙がうかんでいました。船の人も泣いていました。

「そう何時までも泣かずに置き、お婆さん。」

一里も来たところでお爺さんはこう云いました。

「ええ泣かないで置こうと思うのですがね、二人の孫が目<sup>まご</sup>のそこに残つ  
て。」

「孫はこれから行く朝吉の家にもいるだろうよ、お婆さん。」

「ええ。」

「氣をまぎらせないではいけない。ねえお婆さん、新平が船へつんでく  
れたものがあるだろう。」

「ありました、ありました。」

とお婆さんは顔を上げて云いました。



「それでもなぐさみに見て見ようかな。」

お婆さんは船の片わきから長い包みを取り出しました。

「なんでしよう。」

「つえかな。」

「四五千年の爺さんではあるまいし、まだつえは要らないがなあ。」

「かさです、かさです。」

とお婆さんは云いました。

「あい、かさかい。」

と云いながらお爺さんは、かさを手に取ってぱつと廣げました。紙はもうほとんど皆ぼろぼろになつて骨ばかりのようなのです。

「なるほど、これは一番不用なものだらうなあ、お婆さん。」

「よく考えましたねえ。」

二人はなつかしい子なものですから、こんなことにもひどく感心させられていました。お婆さんの泣き顔はもういつの間にかなおつていました。船は止む間なしに流れを走つて行きました。

「お婆さん、まあ何といういいけしきだろう。」

お爺さんはおどり上るようにこう云いました。いつの間にか船は兩がわの山に花がいつぱい咲いた所へ来ていました。さくらの花も普通の色ばかりではなく、樺色、うすむらさき、やや濃い紅、白、水色なども交ぜて頂に咲きつづいているのでした。その間には火のような色をしたかえでの木と青かえでの木が美しくい光りようをした葉を見せているのです。松の木には、むらさきの藤、白藤、紅藤がかかっています。その類ではまだ白アカシヤ、紅アカシヤも咲いています。水のほとりには菖蒲その上の岩の間などには白と黄の山吹、名もわからない蔓草の花などが



幾十色となしに咲いているのです。桃も梅もすもももとよりあります。それ等の木の下には草花が數かぎりもない色を見せ、香を放っているのです。思わずある岩の下で船を止めました。そして見ても見ても眺めても眺めても心は飽くことを知らないのです。時間もどれだけたつたか知らないのです。

「お爺さん、船を上つて今夜は花の中にとまつて行こうではありませんか。」

とお婆さんが云い出しました。

「ああ、そうしよう、そうしよう。」

二人はゆめを見るように思いながら花の中を分けて行きました。

二人が目をさました時にはからだをおおうた草の花には香のするつゆが白くかかっています。上を見上げると梢の花の間からは美しく

い朝日が顔を見せていました。二人のそばには何と思つて持つて來たのか、あの新平のおくつた破れかさが横たわっています。老人たちは同時にそのかさに氣がつかしました。

「お爺さん、やつぱし新平が守つてくれたのですねえ。このきたないかさがなかつたら私らは美しい花に酔つたままで死ぬ所だったかも知れませんよ。このきたないもので昨日のことも前のこともありと解つて來ましたよ。」

とお婆さんは云いました。

「おれもそう思ふよ。」

とお爺さんも云っていました。

「お爺さん、今朝吉の家へ持つて行く物の心配は入りませんね、この山の花を少しづつつんで行つてやればようござんすよ。」



こう云つて二人は手分けをしてなるべくちがった花を一つ一つ折つて  
行こうとしました。

「お爺さん、あ、そこにおいでですか、どうですか、持ち切れませんね  
え。」

お婆さんは花の中から顔を出してこう云いました。

「わしはこんな風になっているよ。」

「どうつてです。」

見ますとお爺さんは、かさの破れた穴へつんだ花をさしているのです。  
ですからいくらでも早くたくさんの花が取れるのでした。

「ぢやあ私もかさへさしましょう。」

お婆さんも手にためていた花をかさへさして行きました。もう破れが  
さとは云おうとしても云われません。めずらしい美しい、見事な花が

さになつていゝのです。草花を二三百もつんだ後でお爺さんはまた木に  
昇つてめずらしい花のいろいろを折つて來ました。そしてそれも皆かさ  
へさしました。このかさで朝吉をよろこばせる楽しさを語りながら二人  
は船へ歸りました。

瀬の早いところで船は矢のように走りまゐりました。しかしうねうね川の第  
三の曲り角へ來ました時にはそれもゆるくなつていました。花がさには、  
ふろしきがかぶせられてありました。中で一泊を越したものですから船  
から上りました時こくはまだ午前でした。二人は花がさを大事にしたが  
ら朝吉の家をさして行きました。みちみち大ぜいの人に老人たちはあ  
いました。

朝吉の家は喜作の家にも勝つた大きい家で、門の中には白馬に赤い切  
れのかかつた鞍を置いたのが一びきつないでありました。



「ごめんなさい。朝吉はいますか。」

下男が四五人もばらばらと出て來ました。

「旦那ですか。旦那は山のお宮へおいでになりました。今これからおぢようさんがお出でになるところです。」

「朝吉のむすめかえ。」

とお婆さんはたずねました。

「ええ、そうです。おぢようさんがお祭に村の人の總代になつてあの馬に乗つてお宮へおいでになるのです。」

下男の一人は鈴をぢやらぢやらと云わせている馬を指さしました。

「お出かけですよう。」

と云う聲と一所に、十四五のきれいな少女がむらさきのふりそですがたで、げんかんへ現われました。

「美しい子だねえ。」

「なんてまあ可愛い子でしょう。」

門内には、いつのまにか祭使の出立を見ようとしている群衆がいつばい來ていました。花子と云う少女はひらりと白馬に乘りました。

「お婆さん、花がさをおやりよ。」

「おう。」

と云つて急いでふろしきを外してお婆さんは花がさを馬上の花子の手にわたしました。

「さあ、さしてお行き。」

「ありがとう。」

花子にはこやかに笑を見せておぢぎをしました。

「花がさのおひめ様。」



「花がさひめえ。」

と見物人はほめました。馬はじゃんじんと歩き出しました。お爺さんとお婆さんも我知らず花子の馬の後からついて行きました。

村長の朝吉は神主と一所にお宮の山門に立つて祭使の馬を待っていました。

朝吉は坂道を上つて来る花子の頭がきれいであるとも美しくいとも云いようのない花がさでおおわれているのに気がつきました時には、胸が破れるほどのよろこびを感じました。両側の見物人は花がさの色とほいに酔わされた風でした。

花がさとむすめにばかり注意を拂っていました朝吉は馬につづいて前を過ぎた兩親に気が付きませんでした。お爺さんもお婆さんもむちゅうになつていて何も気が付きませんでした。

社前で馬をおりて拜れいを行いました花子は花がさをさしながら父のそばへ来ました。

「花子や、花がさは誰にもらつたのかえ。」

と朝吉はむすめに云いました。

「お父様、これはね。」

花子はお爺さんとお婆さんが自身と一所に來たことを知つてましたから後を見返つて、群衆の中からその顔をさがし出そうとしました。

「あの方が下さいましたの。」

「どの方。」

「あのお爺さんとお婆さん。」

朝吉はむすめの指さす所に立つた兩親の顔を初めて見ました。

「やあ、お父さんと、お母さん。」



「朝吉や。」

二人は一所にこう云いました。

「あなた方でなくて誰がこんな物をおくつてくれましょう。ありがとう  
ございます。花がさをありがとうございました。」

朝吉はあらためて禮を云いました。

そして、

「おまえは村を廻つておいで、私は直ぐ家へ御兩親の供をして行くか  
ら。」

と花子に云いました。

「ではのちほど。」

花子はやさしく祖父母にあいさつをしてまた馬に乗って行きました。

そして花子はいたるところで花がさひめと云つてほめられました。花子

は歸つて来て父母にその話をしました。

「おみやげのお禮は申し上げようもありません。」

と何度も何度も朝吉はお爺さんとお婆さんに云いました。

「朝吉や、あれはね、實際はね、私達が新平にもらつて來たのだよ。」

とお爺さんは云いました。

「あ、そうですか、新平兄さんはどうしておいでですか。」

と朝吉は聞きました。

「やつぱり貧乏らしいよ。」

とお婆さんが云いました。

「そうですね、ついうかうかとしばらく御無沙汰をしていました。さつ  
そく使を出しまして入用の物を持たせて上げることになりました。」

と朝吉は云いました。



「そうしてもらえたら私らも安心だよ。」

とお婆さんは云つていました。三四日して老人たちは林四郎の家へ行くことを云い出しました。朝吉は名残おしいが已を得ないと云つていました。

立つ時にはもとより大ぜいの者が船へ老人を送つて來ました。

「お父様、あれで新平さんのところへ使が行くのです。」

朝吉は他の一艘の船を指差してこう云いました。その船にはいろいろな物がせられてありました。朝吉はまたお爺さんとお婆さんの船へも数々のおくり物を積ませようと思いました。

「わしの方は何もいらない、いらない。」

とお爺さんは云いました。

「でもそれではこころざしが通りません。」

「では小さいものを何か一つもらつて行きましよう。」

お婆さんは下男のかかえた品物の中から手ぬぐい包みほどの物を一つだけ抜き取つて船へ乗りました。お爺さんはともづなを解きました。

「さようなら。」

「さようなら。」

うねうね川の水には今日もあたたかい快い日がいっぱい當つていました。

「新平のこともあれで安心しましたよ。お爺さん。」

とお婆さんは云うのでした。

「新平はあれでまたほどこしをするだろう。」

「それでは何にもなりませんねえ。」

「そんなことがあるものか、新平のような男は人ほどこしをしないのが、



我々の御飯を食べないでいるのと同じほどの苦しみのだよ。」

「なるほど、そうでしょうね。お爺さん。何しろまあいい。」

「いいとも。」

「やれ、やれ。」

「今日も途中に花の山があるかしらん。」

と云つてお爺さんは行手をはるかに眺めていました。

「そんなにどこにもあるものですか。」

「なければ林四郎に持つて行く物がないぢやないか。」

今日はお爺さんの方がこんなことを云いました。お婆さんもさつきからしきりに親思いのやさしい林四郎のことを思っているのです。お婆さんは思い出したように朝吉にもらつて來ました手ぬぐい包みのような物を開けました。

「おや厚紙あつがみでしたよ、お爺さん。」

お婆さんはその紙をお爺さんにわたしました。

「何かえ、これでまた林四郎のみやげ物をこしらえるのかえ。」

「そうでもありませんよ。」

「と云つて外には何もないしなあ。」

「紙ではくつも出来ませんし。」

お婆さんはちつと首をかたむけて考へ込みました。

「まあそうくよくよしなくてもいいよ。飛び込んで來るかも知れないからなあ。」

「またお爺さんの口くせが出ました。」

お婆さんは笑いましたが、ちやうどその時目の前に現われた山に少しかわつた形の松の木などがありました。そのうちみやげ物のことなどは



忘れてしまいました。

「ゆうべね、お婆さん、わしは自分の年を考えたがね、わかつたよ。」

とお爺さんは手を打って云いました。

「そうでしたか、おいくつでした。」

「わしはな、二千六百九十九歳だつたよ。」

「そんなものですかねえ。」

「皺もあるなあ、かなりは、は、は、は、は、は、」

お爺さんは顔をなでながら云いました。

「皺は私にもありますよ。」

お婆さんも自身の顔をなでていました。

「假面と云う物にこんなのがあつたなあ。」

「あります。あります。」

「わしの顔を假面にして持つて行つてやつたら林四郎はよろこぶだらうな。」

「あ、そうでしたよお爺さん。」

お婆さんはあわただしくあたりの山を見廻しました。

「何か落したのかい、お婆さん。」

お爺さんは驚いてこう云いました。

「なあに、そうぢやありませんがね、山にあなたの顔や私の顔を假面に彫るような木がないかと思つたのですよ。」

とお婆さんは云うのでした。

「じようだんぢやないよ。お婆さん、わしらは素人ぢやないか、どうしてお假面がほれるものか。」

とお爺さんは笑いました。



「せめて皺だけでも。」

「あ、いいことを思い附いた。」

とお爺さんはひざを叩きました。

「何ですか、お爺さん。」

「こうするのだ。朝吉のくれたこの厚紙を三枚も重ねてね、そして水でぬらしてわしの顔へ當てるのだ。お婆さんもそうするのだ。ちんみりとぬらして置く位にしてください。そうすると顔の通りに紙がなるだろう。最初には鼻と口だけをはがして下から息をするのだ。そうすれば死ぬ氣ずかいはない。そうしてこのいい日のあたる下にいたらかわくだろう。すつかりと水氣が取れてしまえばお假面が出来るわけだよ。お婆さん。」

「なるほどあなたはちえがありますねえ。」

お婆さんは目をまるくして感心していました。

「そんなにほめないでもいい。」

「しかし今日のうちにかわきますかねえ。」

とお婆さんは氣がかりらしく云いました。

「さあ、それはよくわからん、ことによつたら一晩くらい船にねてもいい。」

お爺さんは花の山で一晩ねたものですから大たんになっているのでした。

「とにかくこしらえにかかりましょう。」

二人は川水で厚紙をいい程にしめらせて自身自身の顔へあてました。しばらくして鼻と口をはなすことも初めの計かく通りにしました。しかし、なかなか容易にはかわきそうでありませんでした。その上、目がふ



さがれていきますから船を進めることも出来ません。二人は仕方なしにある岩へ手さぐりに上つて、そこで紙の假面のかわくのを待つていました。川べと云いまして、もともと高地なのですから、こんな物のかわくのも早いと見えます。四五時間するともうかんかんの紙の假面が出来上りました。

「もういいだろう。お婆さん。」

「私もそう思つていました。」

二人は假面を初めて外しました。しかしもうあたりは鼠色に日が暮れていました。

「仕方がない、船でとにかく今夜は明そう。」

とお爺さんは云つてました。お婆さんはお爺さんの假面を手にもらつて透して見ながら、

「よく出来ましたよ、お爺さん、まるで明神さんのようですよ。」

などと云つてました。二人は暗い船の中で辨當の残りなどを食べてました。

「ろうそくが一本あればいいなあ。」

「こんな暗がりの中にいたことはありませんね。」

などと云いながらも、つみのない二人はそのままぐつすりとなむりに落ちてしまいました。

ひるま二人の老人が假面をかわかしてましたその岩のもう一つ上の大岩へ一時過ぎから火がたかれました。それをかこんだのは五六人の荒男でした。皆、鬼のような顔や目附をしている人たちなのです。

「金持だと云うことだったが、それ程大した品物もなかつた。」

「何だつて、てめえはこの金でかざつた刀をごまかして自分で取ろうと



思うんで、そんなことを云つてるのだろう。」

「何だと。」

「だまれ、二人だけで刀かたなの話が決きまると思ふのかい、おれのふところに  
も人切ひききり庖丁ばうちょうがあるぞ。」

「何だ、生なまいき。」

「何だと。」

「何だと。」

「よく聞け、最初あの家へ入ることをおしえてやったのはおれさまだ  
ぞ。」

「それでどうしたと云うのだ。」

「現金げんきんだけはおれによこせと云うのだ。」

「おれが一等のはたらきをしたのだ。衣類いるいはおれがもらうんだ。」

「おまえもふといやつだ。」

「ゆるしてやらないぞ。」

山ぞく共どもでこれはあつたのです。

船にいるお爺さんとお婆さんは賊同志ぞくどうしの打つやらけるやらするさわぎ  
の餘りの高さたかさに目をさましました。

「お爺さん、お爺さん。」

とお婆さんは小聲ここゑで云いました。

「知つているよ、どろぼうだ。」

「にげましょう、早く。」

「くらがりで船もこげやあしない。」

「いいえ、月が出ましたよ。」

お婆さんは心細こころほそそうな聲こゑでこう云つて空を見上げました。



「やつぱり動いちゃいけない、やつらに追っかけられるよ。」

「ぢやどうするのですか。」

「假面で顔をかくしてちつとしていよう。」

お婆さんはだまつて假面の一つをお爺さんにわたしました。自身もかぶりしました。

賊どもはもうけんかもよして持つて來た酒などを出して飲んでいました。

「いい月夜だなあ。」

「いい氣持だなあ。」

賊の二人程は岩はなへ來て川のけしきを見ていました。

「しつ、しつ、しつ。」

その一人はこう云いました。そして忍び足で仲間のそばへ寄つて行き

ました。

「しずかにせい、しずかにせい。」

「なんだ。」

「あみが下りた。」

「そうか、どこだ。」

「川だ、船だ。」

「どこに。」

また別の一人が岩はなへ出ました。

「やつ天狗様だ。」

とその男が云つたかと思ひますと、どぶりんと水の音が高く立ちました。どんぶりこ、どんぶりこ、そのまゝその男は流れて行きました。

岩の上の仲間はいよいよ大事が身にせまつて來たと思つたのでした。



「何しろ人間ぢやない、神様か、天狗様か、化物がおれたちをとらえに  
來ているのだ。」

「え、そうかい。」

「虎公を見い、引きずり込まれたぢやないか。」

「わあつ。」

賊は一度ににげ出しました。一たんは持つて行こうとした品物も皆投  
げ出して行きました。

「わしにはばちをあてないで下さい。心を入れかえますから。」

と云い云いにげた者もありました。山の中はもとの通りにしずかにな  
りました。

「もう大丈夫でしようか、お爺さん。」

とお婆さんはささやくのでした。

「よく解らないよ。朝まではまあこのまゝでいよう。」

そのうち二人はまた心のつかれてねむつてしまいました。はだが汗ば  
んで來ましたので、老人たちは思わず顔の上のつた假面を手ではらい  
のけました。水にはきらきらと日があたつていました。

「山賊の來ていたのはあれはゆめだろうか。お婆さん。」

「どうしてゆめなものですか、こわかつたですなえ。」

お婆さんは思い出すだけでもからだがふるうと云う風でした。

「あの岩の上だつたなえ。」

お爺さんは昨夜の夜空を見上げました。

「早く林四郎のところへ行きましよう、お爺さん。」

とお婆さんは云いました。

「まあお待ち、どろぼうは確かぬすんで來た物をすてて行つたようだか



らそれを見て行こう。」

お爺さんはとんとん岩へ飛び上りました。お婆さんも船を出ました。

「お婆さん、お婆さん。」

お爺さんは上の岩から大きい聲で呼んでいました。

「何ですか、何かいますか。」

「なあにそうぢやない。お婆さん、ゆうべのどろぼうは林四郎の家へ入ったどろぼうなんだよ、しようがあるよ、来てごらん。」

「まあ、まあ。」

お婆さんも大岩へ上りました。

「そらお婆さん、林四郎を分家させる時に、林四郎におくるとわしが小刀の先でほつてわたした刀があるよ、そら。」

「そうです。そうです。」

二人はおどろきながらなおもその外に見知りの品がないかとさがしましたがそれはありませんでした。

「ともかくも刀だけはわしが林四郎の所へ持って行ってやろう。外の物のしまつは林四郎にあつてからにしよう。」

とお爺さんは云いました。

「そうですよ、どろぼうとまちがえられると大へんですね。」

二人はまた流れにうかぶ船の中の人になりました。

「どろぼうに入られてあの氣のよわい林四郎はどんなにびっくりしたでしょう。かあいそうですね。けがなんかはしなかつたかしら。」

お婆さんはまたこんな心配をし初めました。

ひる前に船はうねうね川の第四の曲り角へ來ました。どこへ船をつけようかとお爺さんが見まわしています時、岩の上にせの高い人が二人立



つているのに氣が附きました。お爺さんとお婆さんは昨夜の賊の仲間ではないかとかからだをふるわせました。

「まさか昨夜の手合ではないだろうがね、用心にどんな話をするか聞いてから上ろう。」

「ええ、そうしましょう。」

船は洞になつた岩の下へかくれました。二人の人は少しずつ岩の上を歩いて話しているのです。

「そんなにくよくよと思わないでお置きなさい。ぬすまれたものはあきらめるより仕方がありませんよ。」

「それはそうですとも。けれどたった一つだけいのちにもかえられないほど大事なものがあるのです。」

「それは何ですか。」

「親父から分家の時にもらつた金作りの刀です。」

「それはおしいでしょう。金作りでは大した物ですからね。」

「なあと、私は金作りだからおしいのぢやありません。父からもらつた時のことがわすれられないのです。自分だと思えと父は云いました。

母も大事におしよおまえを守る刀だよと云いました。私は刀を見るたびに父母の顔がうつつて見えるように思つていたのです。こんなことから大事な父母のことを少しづつわすれて行くのではないかと思うと、死んでしまふ方がいいと思ひます。これからはここへ来てうねうね川を眺めて父と母を思うより仕方がありません。」

林四郎はこう云つて男泣きに泣いていました。

「お氣の毒ですなあ。ぜひ骨を折つてどろぼうをさがし出しましょう。刀の外にもいろいろな物をおぬすまれになつたのでしよう。」



「それはよくしらべもせず、またおいしいとも思っていないません。」

「そううかがうと、いよいよ刀をおさがし出ししなければなりません。」

林四郎の友人の大助はこう云っていました。小さい船がするすると岩の中から出て二人の前へ来ました。

「林四郎、川上のわしらが出て来たよ。」

お爺さんはこう云いました。

「刀も持つて来て上げたよ。」

とお婆さんは云いました。お爺さんは刀をさし上げて見せました。

「あなたはお父様だ。お母様だ。」

林四郎は船へ乗りました。大助もその後へついて来ました。

林四郎は両親の手を取つて泣いてました。

「林四郎さん、しつかりしないではいけませんよ、全たいどうしたこと

ですかこれは。」

と大助は云うのでした。

「あなたは親切な方ぢや皆聞いていました。」

とお爺さんは大助に云いました。

「私らは林四郎の両親です。」

とお婆さんもその人に云いました。

「林四郎さん、よく考えてごらん、川上のご両親がこんな所へ不意に現われておいでになるなんかちつとふしぎだよ。ねえ、林四郎さん、人をだます狐と云うものがあるからな、狸と云ふものもあるからな。」

「私は狐でもいいのだ、狸でもいいのだ両親のすがたを見せてくれて居る間は大切にする。まただましてくれた禮も云ふ。」

「そうら、そんなことを云うのが大分あやしいなあ。」



「お父様やお母様は腹を立てないで下さい。大助さんはいい人なんです  
が私を案じてこんなことを云つて下さるのです。」

と林四郎は兩親に云いました。

「何の腹を立てるものか、おまえのような孝心のふかい子の友達なんだ  
もの。」

とお爺さんは云いました。お婆さんは林四郎の愛ぢやうのふかいのを  
思つて、さつきからは涙ばかりをぼたりぼたりとこぼしていました。

「それはまあ川上からおいでになつたとしても刀までも持つておいでに  
なるのはふしぎじゃないか。」

と云う大助にお爺さんは、

「御もつともです。」

と云つてゆふべある岩かげで假泊したこと、夜申すぎに人聲がするの

で目をさますと大きい岩の上でたき火をして居る人等のあつたこと、そ  
の男等のけんかをして居たこと、誰かが船に居る自分等を見附けて知ら  
せたので、あわてて一人が水に落ちたこと、外の者もぬすんだ金品をす  
てて皆にげてしまったこと、今日になつて、岩の上へ上つて見るといろ  
いろの品がおかれてあつて、その中に見おぼえのある刀のあつたこと、他  
の品々は皆そのまゝにして林四郎にとどけようと刀だけを持つて船に乗  
つたことなどを語りました。お婆さんも横から言葉をそえていました。

「それにしても若い大勢のどろぼう等がこの老人方をおそれてにげると  
は一寸受けとれませんねえ。」

と大助は云いました。

「大助さん、それは何と云つても私の父は二千何百の年齢をして居るの  
ですから、ふつうの人とはちがった處があつて、それでそんなことも



あるのですよ。」

と林四郎は云いました。

「そうかも知れん、ばちは當てないで下さいなんかつてわし等に云つて居たからな。ねえお婆さん。」

「そうでした、そうでした。」

二人とも、いような紙の假面が賊をおそれさせたのであるとは知らないのでした。林四郎ももとより知るわけがありません。

「林四郎さん、それでは私はあなたの家の下男たちをつれてそのお話の岩のところまで行つて残りの品物を持って來ましょう。」

ようやく得心をして大助はこう云いました。

「ではそう願ひましょう。」

と林四郎は云つてました。

「よろしく願ひます。」

「すみませんですな。」

と老人たちは云つていました。

お爺さんとお婆さんは餘りの居心地よさに林四郎の家にはついうからか一月餘りをとどまつていました。

「お婆さん、こんなことをして居ては旅が出来ない、そのうち千年位はたつてしまふよ。明日はいよいよここを立つて省吾の所へ行こうぢやないか。」

とある時お爺さんは云いました。

「そうですねえ。林四郎のようなやさしい子はめずらしいですからねえ。」

お婆さんは思ひ切りわるくこう云うのでした。



「しかしずい分省吾もかわいい子だった。」

「そうでしたね、お爺さん。」

「そうだとも元氣のいいことはこの上なしの子だった。」

「お爺さん思い切つて林四郎に別れて明日でも立ちましよう。」

とお婆さんも云いました。お爺さんがそばへ來ました林四郎にその話をしますと、林四郎は何も云わずに涙をこぼしました。

「私たちと別れるのがそんなにいやなのかえ。」

とお婆さんは云いました。

「はい悲しうございます。またいつお目にかかれるでしょう。」

兩親の顔を正面から見て、林四郎はたまりかねたように聲を上げて泣きました。

「おお、お婆さん、あれを林四郎にわたすのをわすれたのぢやないか。」

とお爺さんは云いました。

「あれとは。」

「あの假面をさ。」

「おう、おう。」

お婆さんはあわてて後のとだなを開けました。そして包みの申から紙ぶくろの自身たちの假面を出して持つて來ました。

「林四郎や、これはお父様と私の顔なんだからね、これを見てね、私たちがそばに居ない時にも居ると思つておくらしねえ。」

とお婆さんば云いました。

「しわがよくにて居るぢやないか。」

とお爺さんは云つていました。兩親の假面を手に取り上げた林四郎の顔にはにわかになまめとした色があらわれました。



「よくにっています。お父様と一所です。お母様と一所です。」

「それを私たちと思うことが出来るのかえ。」

お婆さんは林四郎の顔をのぞくようにしてこう云いました。

「ええ、そう思つてくらしきましょう。よろしいからお父様もお母様もお立ち下さい。私があなた方を見たいように省吾もまた早くおあいがいしたいでしょう。」

と林四郎はきつぱり云いました。

老人たちの船へ乗りました時、林四郎は二反たんの黄色きいろもめんをおくりました。

「私たちの着きがえのじゅばんにさせようと思つて林四郎はそれをくれたのでしょうね。」

お婆さんは船の中でまんぞくげに黄もめんを見ながら云つてました。

「よく氣のつくむすこだから。」

お爺さんはお婆さんがまだ林四郎のことを思い出して泣き出してはこまると思つたのですから、

「またしばらくぶりて船に乗つて見るといい氣持だなあ。」

こんなことを云つてあちこちとけしきを見まわしていました。

「いいけしきですねえ、林四郎のこしらえてくれたおんべんとうをこの船で食たべるのがたのしみですねえ。」

「そうだ、そうだ、お婆さん。」

「しかしお爺さん、今日はとちゆうでとまったりすることはよしましやう。この間はどろぼうがにげてくれたからよかつたけれど。」

「わしもそう思つて居る。」

こんな話をしていました。



「お爺さん、私はね、省吾しやうごにいい土産みやげを持って行つてやる考かんがえが附きましたよ。」

お婆さんは微笑びしょうをしながらこう云いました。

「それは何だえ。」

お爺さんは船の中を見まわしました。青がえるは飛び込んで來ても居ません。

「あの子はね、元氣のいい子でね、戦いくさごつこなんかがすきでしたからね、私はね、この黄色きいろもめんでね、大きいはたを二つこしらえて持つて行つてやろうかと思ひます。」

とお婆さんは云いました。

「それはいい、それはいい。」

お爺さんは手を叩たたいてうれしがりました。お婆さんはまたしんげんぶ

くろからはさみや糸いとを出しました。

三時頃には山吹色やまぶきいろをした二流のはたが船の中で出來上りました。

「竹ざおをお爺さんしんばいして下さいな」

とお婆さんは云いました。

「何でもないことだ。船さえつけければ竹ざおなんかはいくらでもある。さつそくここらへ上ろう。」

船は岸へよせられました。お婆さんもどろぼうの來るのがこわいものですから、船ではまたずに一所おかに陸へ上りました。お爺さんは小このこぎりでどこあいの竹を二本切りました。

「それにはたが附いたら重くてお婆さんには持ちきれぬだらうかな。」  
山をおりながらお爺さんはこう云つてました。

「大丈夫ですよ。七十や八十の子供ではあるまいし。」



とお婆さんは元氣よく云いました。

二人は船の中で直ぐにはたを竹ざおへ附けて見ました。

「りっぱだねえ、お婆さん。」

「見事ですねえ、どんなに省吾しやうごがよろこぶでしょう。」

などと云っていました。

ちようど午後の五時前に船はうねうね川の第五の曲まがり角かどへ着きました。陸上では何とも解わからぬいろいろな物音がするのでした。

「お婆さん、あのぶらぶらと云うのは法蝶ほらの貝かいらしいではないか。」

「そうですね、何かしらおそろしい氣がしますねえ。」

「そらまたぶらぶらと鳴なる。」

「ええぶらぶらと吹ふいています。」

「がちゃがちゃと鳴るのは、棒ぼうされて人が仕合しあひをして居る音にちがいな

い。しかもたくさんな音だよ、お婆さん。」

「戦いくさでしよるか、お爺さん。」

「どうもそうらしい。」

「たいへんですねえ。省吾しやうごはどうして居るのでしよ。」

「とにかくこうして居られない。お婆さんもゆうきを出さないではいけないよ。」

とお爺さんは云いました。

「ええかくごをしていますとも。」

「さあ二人でこのはたをかついで省吾しやうごの家へまで行こう。」

「行きましよう。」

老人たちは、

「えんやらさ。」



「よいい、よいい。」

とかけ聲をしながら黄色のはたを立てて岩の道を里の方へ上つて行きました。さわがしい物音はますますひどくなつて行きました。高い所へ来て下をずつと見おろしてますと、百五六十人の黒い人かげが手に手に棒のような物を持って岡の上の一けんの家をかこんでいました。その家からも幾十人かの人が出て應戦をしていました。お爺さんとお婆さんの居るちようど下の道を通つて行く二人の人がありました。

「省吾さんと云う人はもともといひ人なんですから百姓たちも十分それをおみこんで居るのですがなあ、あんまりゆうきがあり過ぎて時々らんぼうなこともするのでこんなことにもなつて來たのですよ。」  
「いくら強い省吾さんでも今度ばかりはさんざんな目にあうでしょう。」  
「そうですよ、しかしとにかくあの人の方が勝たなければこれからあの

人の命令は誰も聞かないことになつて、村はよくおさまつて行きますよ。今度百姓たちをおだててそうどうを起させた權次郎などはかりがいばるでしょうよ。」

「そうなつてはこまりますなあ、どうぞ省吾さんに勝たせたいものだ。」  
二人の男はこんなことを話していました。お爺さんとお婆さんのおどろきはたとえようもありません。お爺さんはうなずきながら木の間から黄色のはたを下の道から見えるようにふりました。お婆さんもそうしました。

「皆きけい。うねうね川の川上の一たいが省吾の味方にまいったぞ。我々はその先とうなるぞ。」

とお爺さんはあるかぎりの聲を出して云いました。二人の男はこしをぬかすばかりにおどろきましたが一さんに走り出しました。その一人は



百姓方へしらせに行つたのでした。

「皆さん、皆さん、けがないうちに引きなさい。省吾さんの味方が  
數も知れない程うねうね川から船で上りました。今あの山を上つて行  
きました。もうつい來ますよ。」と云いました。

「ほんとうか。」

權次郎と云う大將がこう云いました。

「ほんとうとも金のはたを持って居る。そら見えるぢやないか、皆ごら  
んなさい。」

百五六十の顔は皆その男の指さす方へ向きました。二流の金色のはた  
は日を受けてゆらゆらと動いていました。

「この不意うちに敵の援兵が來るとは全く意外だ。とにかく退け退け。」  
權次郎がこう云うのも待たずに大ていの人走って行つたのでした。





省吾の方へしらせに行つた方の人は、

「援兵えんべいが來ました、援兵えんべいが來ました。」

と云いました。

「どの方角からだ。」

と馬に乗つた省吾が云いました。

「うねうね川から金のはたをふつて來ました。そろそろ山にかかつています。」

「ほんとうか。」

「そらあすこに。」

「やあ金のはたが二つ來た。」

省吾は思わずその方をおがみました。

「さあ皆の者金のはたが助けに來たぞ。」



こう云われて人人は

「わあつ。」

と一度にさげんで田圃<sup>たんぼ</sup>へ走りおりました。ちやうどその時は百姓<sup>しやくしやう</sup>方がちりちりに散つて行つた時でした。金のはたはゆるゆると林の中を出て來ました。

「えん軍ばんばんざい。」

と省吾は云いました。人人は目の前に現われたのが唯二人の老人だけであるのにあつけに取られていました。

「おお、あなた方は御兩親だ。」

と云いまして省吾は馬から飛びおりてお爺さんとお婆さんの足元へひざまずきました。

「敵<sup>てき</sup>はどうしたえ、省吾。」

とお爺さんは云いました。

「もうすっかりにげました。御安心下さい。」

「よかつたねえ、お婆さん。」

とお爺さんは云いました。

「あなた方のおかげです。これで村はよくおさまります。」

と省吾は涙をこぼしながら云つたのでした。

その晩は老人たちが晝のつかれて前後も知らずによく眠りました。

うねうね川から上つたのはえん軍でもなく、省吾の兩親であつたと云ふことはその翌日もう村民が皆知つていました。けれどそのためにまた省吾を相手にあらそおうとはする者がありませんでした。省吾の方でも田へ水を引くことが何かの百姓<sup>しやくしやう</sup>たちとしようとのげんいんになったことを思い直してじようほしたものですから、かえつて戦のあつた前よ



り村民達と中がよくなりました。お爺さんは一しゅうかんほどとうりゅうして居まして、この結果を見ましたのでひぢように安心をしました。「省吾や、どうぞもう手あなことはこの後しないでおくれ。」

お爺さんは船へ乗りに行く時にもまだむすこへこう云っていました。

「大丈夫ですよ。お父さん今日なんか、村の者は皆あなた方を見送りに来るそうです。」と省吾は云っていました。

「ばんばんざい。」

「さようなら。」

船が出て行きます岸の木の間には省吾の敵だった人も味方だった人も皆顔をならべていました。お爺さんもお婆さんもうれしくてならなく思いました。

「ねえ、お爺さん省吾のあの強い心を私は六雄に半分でも持つて行ける

といいと思いますよ。」

船の中でお婆さんはしみぢみところ云いました。

「思うようにはならないものだ。」

「六雄は林四郎よりまだもつと氣がよわいのですものねえ。」

「そうだったねえ。」

「六雄は女のようなはにかみやでした。」

「しかし別れて四五百年たった間に少しはかわったろうよ。」

とお爺さんは云いました。

晝になりましたので二人はおべんとうを開きました。

「ねえお爺さん、省吾はやっぱし、武張つたことがすきですねえ、そら焼めしに梅干のおかずですよ。」

「なるほど、しかしうまそうだ。」



二人はうれしそりに晝めしをすませました。  
うねうね川の第六の曲り角へ船の近ずいたのはその日の午後三時ごろ  
でした。

「お婆さん、お婆さん。」

お爺さんはおどろききわまつたような聲を立てました。

「何ですか、どうしたのですか、お爺さん。」

「あすこをごらん。」

お爺さんは川下を指さしました。虹のような橋がうねうね川にかかっ  
ているのです。

「橋が出来たのですね。さぞまあこの村の人はよろこんでるでしょう。  
さいわいですねえ。」

とお婆さんは云いました。

「ねえお婆さん、六雄は女のようなだ、はにかみやだと云うが、あれが支  
配はいをしている村にこんな橋が出来たのはやつぱし六雄にはたらきがあ  
るからだよ。」

とお爺さんは云いました。

「そうでしたね、子供の時からもちつとだまつて居ながらもいろんなこ  
とを考え出す子でしたからねえ。」

「さあ、六雄に橋のいわいを云つてやりましょう。」

二人は船を上りました。軍いくさではないようですがこの村の中うちもざわざわ  
とにぎわしい物音がして居ました。お爺さんとお婆さんが六雄の家へ着  
きました時、

「主人はただ今一寸人が来て居りますので、用がすみすまで一寸ここ  
で御休息を願います。」



とその家の番頭は云いましてある一室へ老人達を案内しました。お婆さんはむすこの顔が早く見たくてならないのです。

「お客様は幾人も来ておいでなんですか。」

「ええ、それで。まことにすみません。」

と番頭は云います。

「その客室はどこですか。」

「直ぐこのろうかの向うでございます。」

番頭はその方を指さしました。

「御ゆつくりと。」

番頭は出て行きました。お婆さんはそつとろうかへ出ました。そして客室のふすまの間から中をのぞきました。中には七八十人の男女がいました。

「あつ。」

と云ったままお婆さんはお爺さんの居るところへまろぶように入って行きました。

「どうしたのだ、お婆さん。」

「あのね、あのね、今度はね。」

「ふん、ふん。」

「六雄の方ではもう座しきの中へまでせめよせて来ています。」

「何が。」

「百姓たちが。」

「え。」

お爺さんは思わずろうかへ飛んで出ました。お婆さんもまた出ました。「どうしてもしよう知していたゝかなければこまります。」



「ぜひ聞いていただくつもりでまいったのです。」

「おいやなどとは云わせません。」

客室きやくまの中からはこんな聲が聞えるのでした。

「お婆さん、まだこれは談判だんぱんのはれつする前だよ。」

「そうですか、まだ戦いくさにはなつて居ないのでですか、ではまあ少し安心してす。」

「しかしわしが出てはれつするところをはれつさせないですまさなければならぬ。」

「そうです。そうです。お爺さん、私も出て行きましょう。」

二人の老人は客室きやくまへ入つて行きました。不意に現れた白金かみのような髪かみと髭ひげを持った二千幾百歳の二人のすがたにおどろかない者はありません。

「よくおいで下さいました。」

と六雄はていねいにおぢぎをしました。座にいる人もまた皆その通りにしました。お爺さんとお婆さんは少し勝手がちがつたような気がしました。

「私の両親です。皆さん。」

と六雄はしようかいをしました。

「一つ御いん居きよから六雄さんに願つてもらいましようか。」

こう客の中の頭かしらのような人が人人を見まわして云いました。お爺さんはいよいよ談判だんぱんが初まるのだと思つていました。

「ぜひそうしていただきましょう。」

と人人は云つていました。

「はい。何でございますか。私は六雄に代りまして六雄にせき任にんのある



ことでしたら何でもいたしましょう。」

とお爺さんは云いました。

「たのもしいなあ。」

「ばんばんざい。」

などとひくい聲で云うのも聞えました。

「實はねえ、御いん居、私等は六雄さんにお問い合わせを持つて來たのです。」

「なるほど。」

「六雄さんがそれをどうしても御しよう知にならないのです。」

「それはことゝ品とによりますなあ、何か知りませんが。」

「ことと品とによると仰おつしやいますが、これは是非ともお聞きになるべき方のことです。」

「そうですねあ。」

お爺さんは少し心配になつて來ました。何度も何度も六雄の方を見るのでした。六雄は赤い顔をしてうつむいて居るのです。お爺さんの心はいよいよ不安でなりません。六雄の方に悪いことがあるらしいと思うからです。

「六雄さんは八百九十九で今年がおありになります。」

と客の方から云いました。

「まだ何分若わかうごわすからなあ。」

お爺さんは息子をかばうつもりでこう云いました。

「へええ。」

客は後へ言葉がつずかないようです。

「お父様、皆さんはね、こう仰おつしやるのです。私には、年を取つて居るから今度出來たらねうね橋のわたり初めの役をせいとおつしやるの



です。その御用で来て下さったのです。」

と六雄が云いました。

「ふうん、そんなことか、ではさっそくわたり初めをするがいいぢやないか。」

とお爺さんはむすこに云いました。

「是非そう願いたいものです。」

と客は云いました。

「私にはお父様そんなことがはずかしくて出来ないのですから、おことわりして下さい。」

と六雄は云うのです。

「この子にはもつともですよ。」

とお婆さんは思わず知らず云いました。

「こまつたな。」

お爺さんはちつと考え込みました。

「どうでしょう、私たちでは間に合いませんか、私の齡は二千六百九十九です。お婆さんの齡は二千六百七十九です。わたり初めのお役が出来ないでしようか。」

お爺さんはこう云うのでした。

「そう願えればこの上なしだと思いますが、皆さんどうです。」

と客の一人は云いました。

お爺さんはこう云うのでした。

「そう願えればこの上なしだと思いますが、皆さんどうです。」

と客の一人は云いました。

「結構です、結構です。」



「橋のためにそんなめでたいことはありませんよ。」

「そうですね、そうですね。」

と皆云いました。

村長の六雄が出来ないために、その朝行われる筈の橋のわたり初めが午になり午後になりましたが、とうとうその両親の高齢者が二人そろってした式が五時頃にすみました。

お爺さんとお婆さんと六雄の三人はいわいの食たくをかこんでその晩はいろいろと旅中であつた話をしたり聞いたりしました。

「途中で一番おこまりになつたと云うことはどんなことでしたか。」

と六雄はやさしく聞きました。

「それはあの山賊にあつた晩ですよ、ねえお爺さん。」

とお婆さんは云いました。

「しかしまああれは特別だ。どろぼうと云うものは何もそう始終そこらにぶらぶらとしているものではないから、六雄や、これから先のこと  
で心配はしないがいいよ。」

とお爺さんは云いました。

「心配するなとおつしやつても心配ですからなあ。」

六雄は眉をよせてこう云つていました。

「あ、こうなさい、お父様、私の家に非常に力の強い男が一人いますから、それをあなた方のお供にお付けしますから、つれてお行きなさい。  
ぜひそうしていたゞきたいものです。」

と六雄は熱心に云いました。

「悪いことぢやないねえ、お婆さん。」とお爺さんは云いました。

「ええ、そんなありがたいことはありません。」



「その男は力もありますし、ちえもありますから、それがおつきしている間は私も安心が出来ます。」

と六雄は云いましたが、また、

「それから外にまた、何かがあればいいのにと不自由にお思いになったことが途中でおありになりませんか。」

とたずねました。二人はいつもみやげ物があればいいとは云い合うのですが、ここへ來ます時は省吾の家のそうどうの後でしたから何ももらつて來ず、途中でこしらえても來なかつたのですからその話はようしませんでした。

「そうさねえ、お婆さん、あの晩船で灯がともせなかつたのが心細かつたね、ろうそくが一本あつたらと思つたねえ。」

とお爺さんは云いました。

「そうでしたね、あの晩は灯の暗いことがどんなに悲しかつたでしよう。」

「御もつともです。」

と六雄は同情していました。

お爺さんとお婆さんが六雄の家からつれて來ました男はにこにことした笑顔と、人をこらすことの出来る立派な體格を持つていました。六雄が食物の外に父母の船へつみ込みましたのは百本餘りのろうそくでした。船をあやつることの上手な男が新あらたに乗り込んだものですから船はこれまでとは倍はいの速力で進みました。

「あなたの名を聞くのを忘れてました。何と云う名ですか。」

とお婆さんは供男ともおやこに云いました。

「私ですか、まことにつまらない名です。お恥はづかしくて一寸申七にくいよ



うな名です。」

とその男は云うのでした。

「まあいいぢやありませんか、云つてごらんなさい。」

「かたばんです。」

「え、何ですか。」

「私の名はかたばんです、お婆さん。」

「妙な名ですね、かたばんですか。」

お婆さんは、あきれたように云つていました。

「なあにね、お婆さん、六雄はあんな細い氣しほかの附く子だから、私等が旅をしていてべんとうがなかつたりする時の用意にわざわざかたばんを附けて置いてくれるのだよ。」

とお爺さんは云いました。

「まさか私をお食べなさいと云うことではないでしょう。」

かたばんは手で頭をおさえてこう云つていました。

「私たちの齒はに合うものですか。」

「そうだとも。」

三人は大笑いをしました。

午ひるを過ぎたばかりにお爺さんとお婆さんの七番目のむすこの唯七ただしちのいるうねうね川の第七の曲り角へ船は着きました。

兩親を家にむかえました唯七は袴はかまなどをはいてあいさつに出て來ました。

「御無事でお着きになりました、何よりもうれしうございます。」

「おまえの方もかわつたことはないかえ。」

「ええ。」



「かわつたことのないのが何よりだねえ。」

お婆さんは山賊さわぎ、省吾のところの戦さわぎ、六雄の家の渡り初めさわぎに胸ばかりをとどろかせた後ですからほつと安心をしたような顔をしてしました。

「しかし。」

と唯七は云いました。

「何だえ。」

お爺さんはおどろきの聲を發しました。お婆さんも見る見る顔がくもりました。

「かわりはありませんが、あのう。」

「それから。」

「こう云うことがあるのです。」

「どんなこと。」

見ればさつきから氣の浮かないような顔もかなしいような顔もして、  
ると思ふと、お婆さんはもう心配で心配で涙もこぼれて來るのでした。

「一人よそからあずかつて御座います病人が御座いました。」

と唯七は思い切つて云いました。

「なるほど。」

「どんな病氣だえ、唯七や。」

「それがただの病氣なら申し上げなくてもすむのですが、少し精神に異常があるものですから大聲を出したりあばれたりしますので、あなた方がおどろきになるといけませんので。」

唯七は今にもきちがいの叫び聲がしないかと氣にする風であたりを見まわしてばかりいました。



「どうしてもなおらないのかえ。」

「ずい分と手をつくしましたがいけません。」

と唯七は云いました。

「こまつたものだねえ。」

「ただそんな病人ですから、非常にかわつた物と云うような物を見ますと正氣にかえるようです。しかしそんなにまで病人のおどろくようなめずらしいものもありませんから駄目なのです。」

「そうかねえ。」

「あなた方はいろいろなけいけんがおありになるのですから、そのきちがいをおす工夫くふうを御とすりゆう中にお考え附きになりましたら教えて下さい。その親がどんなによろこぶか知れませんが」と唯七は頼んでいました。

二三日のあいだ、お爺さんはきちがいをなおす方法をばかり考えていました。しかしまだ何も心にうかんで來ない風でした。

「お爺さん、あのかたばんに御そうだんをなさいな、きつとちえを出しますよ。」

お婆さんはこう云いました。

「なるほど、そうだ、そうだ。」

お爺さんは早速かたばんを呼びました。そして唯七から聞いたきちがいの話をしました。非常にかわつたものさえ見ればなおるのだが、いい考があれば教えてくれと云いました。

「よろしう御座います。一寸外へ出て參つて直ぐ歸ります。」

こう云つてかたばんは山の方へ行きました。

かたばんの山から持つて歸りましたのは、小枝こえだの多い檜ひのきの一丈ほどの



枯れ木でした。かたばんは無用な枯れ葉や小い枝を拂いまして、それに百本餘りのろうそくをことごとく立てました。そしてはだかになつた背中へそれを負うのでした。お爺さんとお婆さんがそこへ出て來ました。

「やあ、かたばん。」

「お爺さん、このろうそくに火を付けて下さい。」

とかたばんは云いました。老人たちはうなぎながらマッチをすつては、ろうそくに火を付け、すつては火を付けました。つまり人間のイルミネーションが出来上つたのでした。

「さあ、病人のところへつれて行つて下さい。」

とかたばんは云いました。お爺さんは唯七から聞いてあつた離座敷はなれざしきの病室へかたばんの手を引いてつれて行きました。

「病人。」

かたばんは大きい聲でこう云いました。

「はつ。」

と云いまして、病人はかたばんの前へひれふしました。

「わしは不動明王だぞ。」

「は、存じております。」

ときちがいは云いました。

「おまえに附いている病はわしが、この両手でしつかりともらつて行くぞ。しつかりとしておれ、病をはなすのだから。」

「はい。」

「立つてそちらを向け。」

かたばんは木を負つていますからすわることは出来ないのです。きちがいは立ち上つて向う向きになりました。



「よし、たしかに持つて行つてやるぞ。火にからだのもえた不動が持つて行くぞ、いいか、病人。」

「ありがとうございます。」

かたばんはきちがいの背中を三つだけ平手で打ちました。

「よし、持つて行く。」

かたばんは病室を出て来ました。

「熱かつたでしよ、かたばん。」

「御くろうさま、御くろうさま。」

お爺さんとお婆さんは、ろうそくを吹きけすのにいそがしくて目をくるくるとさせていました。

唯七の家のきちがいほうそ ようになおつてしまいました。

「こんなうれしいことはありません。どんなに病人の親がよろこぶか知

れません。」

と唯七は両親に禮を云っていました。

「なあに、わしのでがらぢやないよ。かたばんが考え出したことだ。」

とお爺さんは云っていました。

唯七は両親の立つて行きます時にたくさんのお金をかたばんへ禮として與えました。

「病人などのないにぎやかな所へ今度はお供がしたいものですね。」

船に乗ると直ぐかたばんはこんなことを云いました。

「そうとも、そうとも、八郎はにぎやかな人だよ。」

とお婆さんは云っていました。

「お爺さん、八郎の家へ何をみやげに持つて行きますしよう。」

お婆さんは久しぶりでまたみやげの心配をし初めました。



「今度は心配をしないがいいよ。かたばんと云う人間がいるから。」

とお爺さんは云つてました。

「え、私を菓子くわしの代りに進物しんぶつになさるのですか。」

「そうぢやない、何かまた智恵ちえを出してもらえらるだろうと云うことさ。」

「ちえなんかはうんとありますから。」

なぞとかたばんは云いました。

「何にしようね、かたばん。」

「しかしデパートは山にありませんよ。」

「それはそうだね。」

「私が何かを生捕いけつて上げましょう。」

「生捕るつて。」

「どうせ山ですもの、赤いものか白いものか黒いものです。」

「赤いものとは。」

「猿さるです。」

「白いものとは。」

「兎うさぎです。」

「黒いものとは。」

「熊くまですよ。」

かたばんは一才岸の方へ船をよせて手をのばして一本の長い棒ぼうをひろいました。そして船のそこに一本入っていました火ばしを曲まげてその先へ付けました。

「さあ、赤いものならいくらでもこれで取れます。」

「お爺さんもお婆さんもお唯ちつと見ているだけでした。」



とかたばんが云いましたので、その方を向きますとかたばんの持った棒ぼうの先に一びきの手長猿は手を引きかけられているのでした。

猿は下へおろされて船の中をちよこちよこと歩き廻りました。

「ここらから先には赤い物はいくらでもいます。」

とかたばんは云っていました。いかにもその通りで、少し川を下りますと兩岸の木にも岩にも鈴すずなりに手長猿がいるのでした。

「お爺さん、いかだを少しつくつてそこへ生捕いひつた猿を別にのせて行く工夫をしようぢやありませんか。」

とかたばんは云い出しました。

「なるほど、そうだ。」

お爺さんもさんせいしました。船は岸へ着けられました三人の人は陸へ上りました。二人の木を切り出すのを手つだつてお婆さんもその丸まる

太を川へはこんだりしました。いかだの数は五つ出来ました。

「これさえあれば安心です。いくら猿を取っても船がひっくりかえるよ  
うなことはありません。」

かたばんはいかだの一つの上に乗っているのです。

「ああ、船よりも廣々としていい。一晩くらいここでねてもいいね、か  
たばん」

お爺さんもいかだにいてこんなことを云っていました。

「どうです、今夜はここらで猿の獵りようをしながらとまつて、明日おいでに  
なつては。せつかくいかだも五つまで出来たのですから。」とかたばん  
は云いました。

「さあわしいいが、お婆さんが山賊さんぞくにこりているからな。」  
とお爺さんは云いました。



「山賊が出ましたら山賊獵もしていかにのせて土産にしようぢやありませんか。」

「どうだえ、お婆さん。」

とお婆さんは云いました。

「山賊のみやげは少しこまるけれど、まあかたばんがいれば大丈夫でしょうから、今夜はお付き合ひしましょう。」

とお婆さんも云つてました。かたばんはもう猿獵にかかりました。

「お爺さん、これはあなたにかして上げましょう。私は手でやりましょう。」

かたばんはこう云つて猿釣棒をお爺さんにわたしました。かたばんは岩から岩へつたいまして、まるで秋の山で子供が葺がりをしているほど面白いほど猿をつかまえました。船から手長猿を引っかけているお爺さ

んでももう二十びきぐらいの猿はつかまえました。かたばんのは幾つだかよく數も分りません。

「また後は明日のことにしましょう。」

かたばんは生捕るのを止めて猿を二十びきずつ程いかだへ分けてつみ込みました。

「猿にも夕飯をやりましょう。」

お婆さんはこう云つて六雄のところでもらつて來ました餅を二つずつ出して猿にやりました。船に食料品はまだたくさんありました。それは唯七の方からもいろいろな物をおくつたからです。猿たちは食物をもらったものですからすつかり三人になちんでしまいました。

山賊も何も來ずに無事にうねうね川の夜は明けました。

かたばんは猿釣棒を山の方へさし出しながら川を下りました。それで



道々でもかなり多くの猿を捕ることが出来ました。尾がひっかかったり、いたずら好きな猿がわざわざ手を出してひっかけられたりするので、うねうね川の第八の曲り角へ来ました頃には猿の總數が百五六十匹きになつていました。

「先生。お猿の見世物が來ます。」

「たくさんたくさんお猿がいかだに乗つて來ました、先生。」

「皆さんおいでなさいよう、早く出ていらつしやい。いいものが川を通ります。先生もいらつしやい。」

こんな聲がにわかに近いところで起りましたのでお爺さんもお婆さんもかたばんも川から上を見上げました。堤の上には學校の遠足會らしいはたが立てられ幕がはられてありました。幕の下からは男の子の顔も女の子の顔もたくさん見えるのでした。

「お婆さん、あの學校の先生は八郎ぢやなからうか。」

「さあ、そうかも知れませんが、呼んで見ましようか。」

「それもはずかしいねえ。」

「と老人たちは云つていました。」

「手長猿の船だあ。」

「お爺さんもお婆さんもいらあ。昔話の船やあい。」

男の生徒はこんなことも云いました。船をのぞく人の數が次第にふえて來ました。先生らしい顔も小使らしい顔も川から見る事が出來ました。

「お父様、お母様唯今お着きになりましたか。」

こう云つて堤をあわただしくおりて來る人がありました。船はさつきから止まつているのです。出て來た人の八郎であることは云うまでもあ



りません。

「八郎やよくわかつたねえ。」

八郎は船の中に何時の間にかすわっていました。

「わからないでどうしましょう。」

親子はうれし涙にむせびました。

「今日はちょうど私の学校の遠足でこの堤の上に来ていたのです。そうでなかつたらお目にかかるのがまた幾時間かのびたでしようが幸でした。」

と八郎は云いました。

「全くそうだ。」

「時にこの猿はどういうつもりでおつれになつたのですか。」

と八郎はいかだの方を指さしてたずねました。

「これはおまえへのおくり物なんだよ、八郎。」

とお婆さんは云いました。

「え、私へのおくりもの。」

八郎はげんな顔をしました。

「遠慮はしないでいいよ。」

「そして肉でも食えとお云いになるのですか。」

「そんなことを思っちゃあいない。飼つてやるがいい。放してやつてもいい。」

とお爺さんは云いました。

「そうですか、ぢやあまあ結こうですな、私は肉にでもせいとおっしゃるのならこまつたことだと思つたのですよ。しかしよくよく上手に生捕られましたね。」



「私が生捕つたのぢやない。あすここにいるかたばんと云う勇士が生けどつたのだ。」

お爺さんはいかだに猿と一所にいるかたばんを指さしました。

「そうでしたか、あいさつをしましょう。」

八郎は船を出ました。かたばんも笑いながら岸へ上つて來ました。

「先生どうかよろしく、私は六雄さんの家來です。」

「そうか、よく兩親について來てくれましたね。」

「ありがとう。猿もありがとう。」

二人はあくしゆをしました。

「さあお父様もお母様もかたばんも私の生徒にしようかいしましょう。」

三人はにこにここと笑いながら八郎について堤を上つて行きました。

「皆さん、これは水上の私の父と母とそして家來のかたばんです。この

人たちは手長猿を百びき餘りも生捕つておいでになつたのです。」

八郎は一寸言葉を休めました。

「それで皆さんお猿をほしいと思ふ方は手をお上げなさい。」

わあつと云ふ聲と共に男生徒も女生徒も一人残らず手を舉げました。

おかしいのは四五人の先生と小使も手を舉げたことです。

「皆さんそれではお待ちなさい。猿をつれて來ますから。」

八郎は後を向きました。

「かたばん君どうか願います。」

と云いました。かたばんは川へ走つて行きました。

「僕は一番手の長いのを頂くのだ。」

「私は小さいお猿をいただくのよ。」

などと生徒はうれしがつて云つていました。かたばんは猿を二列にな



らばせてつれて來ました。

「やお猿の一年生。」と云ふ子もありました。

「皆さん猿を一びきずつお家へおつれなさい。今日の遠足はこれでおしまいにします。」

と校長先生の八郎の云ふのを聞きまして、生徒はばらばらと猿のところへ寄ろうとしました。

「一寸お待ちなさい。この猿を生捕つたかたばん君にお禮を一寸お云いなさい。」

と八郎は云いました。

「かたばん先生ばんざあい。」

「かたばん君ばんざあい。」

男の生徒はかたばんを胸上げしました。女生徒は左手を叩いていまし

た。猿までがそれをまねていました。遠足の歸りに生徒は皆一びきずつの猿の手を引いて家へ歸りました。先生も小使もその通りにしました。

八郎校長の家にとまっています間はお爺さんもお婆さんもかたばんも子供のようにむぢやきに生徒等とあそびました。しかしそういつまでも一しよにすることが出来ませんので、またここも立つて行くことにしました。この次にお爺さん達の訪問しに行こうとしてますのは九番目の子の末松と云うむすこの家でした。

「お船だけならおぢやまになるようなものはなるべく御遠慮をした方がいいのですが、いかだが五つも御不用になつていますのですから、私のころざしの物だけは積ませて下さい。それに猿をおもらいした生徒の親たちからもあなた方にお上げしたいと云つていろいろな物を持って來ていますからそれもなるべくは持って行って下さい。お行



きになるところでおほどこしになつてもいいと思ひますから。」  
と八郎の云いました時、

「まあおまえに任せよう。」

とお爺さんは云つたのでした。かたばんはそのことを聞きまして、  
「それは是非もらつておいでになるがいい、物を持つていてそれが害に  
なるのはそれは無茶のよくばりたちだけで、我々は物を持てば持つほ  
どいいことが出来ますからなあ。」  
と云いました。

いかだに積まれました物は米や麥だけでも何十俵と云うほどの量があ  
りました。食料品その他もずい分たくさんありました。

「おむすこさんはもうあとお一人なんでしよう。」  
かたばんはこんなことを云い出しました。

「ああ、そうだよ。」

「それから先は何方へ旅をなさいますか。」

「うねうね川ももう海へ近くなつたのだから我々もそれから海へ旅に  
出かけようかな、初めはそんな氣でもなかつたがねえお婆さん。」

とお爺さんは云つてました。

「それがよう御座んすね。」

とお婆さんは云いました。

うねうね川は第九の曲り角へ出ます少し前に横からあぶあぶ川と云ふ  
川が出て一しよになつて流れるようになっていゝのです。

「お爺さんもう少しするとあぶあぶ川が横から出て來ますから流れが急  
になりますから、そのところ少しだけあなたは船をしつかりと流さな  
いようにして下さい。私はいかだを流さないようにしますから。」



かたばんはこんなことを云いました。

「よし心得こころえているよ。」

とお爺さんは云いました。

「ごうごうと鳴っているのはあれは何ですか。」

とお婆さんは云いました。

「さあ、なんだろう。あぶあぶ川の落ち込む音にしてはあんまりひびき  
が大きすぎるよ。かたばんあの音は何だろう。」

とお爺さんはいかだの方を向いて云いました。

「そうですね、音がしますね、それに見てごらんなさい。川が濁にごつて來  
ましたよ。お爺さん。」

とかたばんは云いました。

「なるほどな。」

「これは唯事ただごとぢやありませんね。」

さすがのん氣なかたばんも少し心配しんぱいな顔をするようになりました。そ  
れでも、

「お爺さんとにかく確しつりとなさい、かたばんがいますから大丈夫は大丈  
夫ですがね。」

と云っていました。

「あつお爺さん。」

「お婆さん。」

船の二人はさげびました。あぶあぶ川が二人の目の前へ現はれたから  
です。あぶあぶ川の水はちようど石灰水いしはいみずのような色をしているのでした。  
それが一丈程の高さの波なみを立ててうねうね川へ出て來るのです。二人が  
おどろいたのも無理はありません。



落合おちあひのところからちようど四五町も下へいつの間にか船は来ていました。さつきほどに流れは急ではありませんが川はゞはむやみに廣くなっていました。平常ふだんは水の中にある木でない松まつや杉すぎや檜ひのきが水面から僅わずかに三尺ほど頭を出しているのを見ますところへんも一般はんに堤つみが切れて洪水こうすいの状態じやうたになっているらしいのです。かたばんのいかだはそこに見えませんが。

「こわいですね。お爺さん。」

お婆さんはふるえていました。

「まあ氣をおちつけておいで、お婆さん。」

「かたばんはどうしたでしょう。」

「かたばあん。」

見わたすところには一そらの船もいかだもなく一人の人もいません。





ぶくぶくといろいろな物だけが水をくぐつて流れて行くのです。

「末松すえまつや。」

「末松すえまつや。」

二人は思はず息子の名を云つたのでした。

「かたばんや。」

「八郎はちろうや。」

「唯七ただしちや。」

「六雄むくおや。」

「省吾しやうごや。」

「林四郎りんしろうや。」

「朝吉あさきちや。」

「新平しんぺいや。」



「喜作や。」

川上へこんな聲が聞えるわけありません。

「ああ誰もいない。」

二人は悲しい聲を上げて泣きました。

「お爺さん、お婆さん。」

これはかたばんの聲でした。どんなに二人の心はうれしかったか知りません。

「かたばんや。」

「今行きますよう。」

川上にも川下にもいかだの影はしかながら見えません。

「どこなんだ、かたばん。」

「ここです。ここです。」

かたばんは水の中から頭を出していました。

「やあ、かたばん。」

かたばんは船の中へ飛び込みました。

「もう安心です。」

「おまえは川へ落ちたのかえ。」

「そんなことがあるのですか。」

「ではどうしたのだえ。」

「あなた方をむかえに來たのです。いかだは少し向うにつないであります。」

「まあよかつたね、かたばん。」

お婆さんは初めて物が云えるようになりました。

「おまえが一しよにいてくれればいつまでここにいてもいい。」



とお爺さんは云いました。

「いいえそうはしていられません。あちらで待っている者があります。」  
「誰だえ」

「いかだにのせてある者が。」

「また猿を取ったのかえ。」

「まさかそんなことはしていられませんよ。」

とかたばんは笑っていました。

「お爺さん、ぶくぶく川の川上に山つなみがあつたのだそうです。さあ  
そろそろ船をやりましょう。」

老人たちはかたばんのするまゝに任せていました。十四五町も下の大  
きい松の木に五つのいかだはつながれていました。

「まあこれはどうしたの。」

とお婆さんは云いました。それはいかだはどのいかだにも七八人の大  
人や子供が乗っていたからです。

「私が猿釣の棒で流れて来た人を皆上げて置いたのです。」

とかたばんは云いました。船もその松の木へかたばんはつなぎました。  
「明日になったら御飯がたけるが今夜はこれでがまんをしてくれ給え。」  
かたばんは助けた人達にこう云いまして菓子やくだものを分けてやり  
ました。

「なあに明日はきつと水が引きますよ。」

ともかたばんは云っていました。

かたばんの豫言した通りによく日は嘘のように水が引いてしまいまし  
た。船やいかだは山の中腹にぐあいよく止つていまして引く水にも流さ  
れずにすんだのでした。



「とにかくこの人たちのことを考えてやらなければなりませんから、いかだを解いてここへ小屋をこしらえて村の人たちが立ちのき先からかえるのを待ちましょう。」

とかたばんは云いました。お爺さんやお婆さんもいいことはするのが好きですから反たいをするわけありません。器用なかたばんに助けられた人人も力を合せて間もなく避難小屋は出来上りました。食料にはもとより差しつかえありません。皆のん氣に幾日かくらしていました。

旅人が人を助けて小屋をこしらえて世話をしていると云ふことが評判になつて聞えたものですから少し遠い街の役人が出て來ました。その馬上の役人は末松でした。

「お父様とお母様とでしたか。」

と末松は夢のように思つて云いました。

「川上から來た私たちだよ。この小屋にいたのは。」

「いいことをして下さいましたね。」

「なあにかたばんと云ふ家來がえらいからなのだよ。」

とお爺さんは云いました。めでたしめでたし。

§ [を] はり §



昭和二十三年七月十日印刷  
昭和二十三年七月二十五日發行

うねうね川



定價六十圓

著者

與謝野晶子

發行者

與謝野道子

港區麻布新龍土町十二番地

印刷者

一乘道明

中央區築地一丁目十四番地

發行所

采花書房

港區麻布新龍土町十二番地

會員番號A二一九四五〇

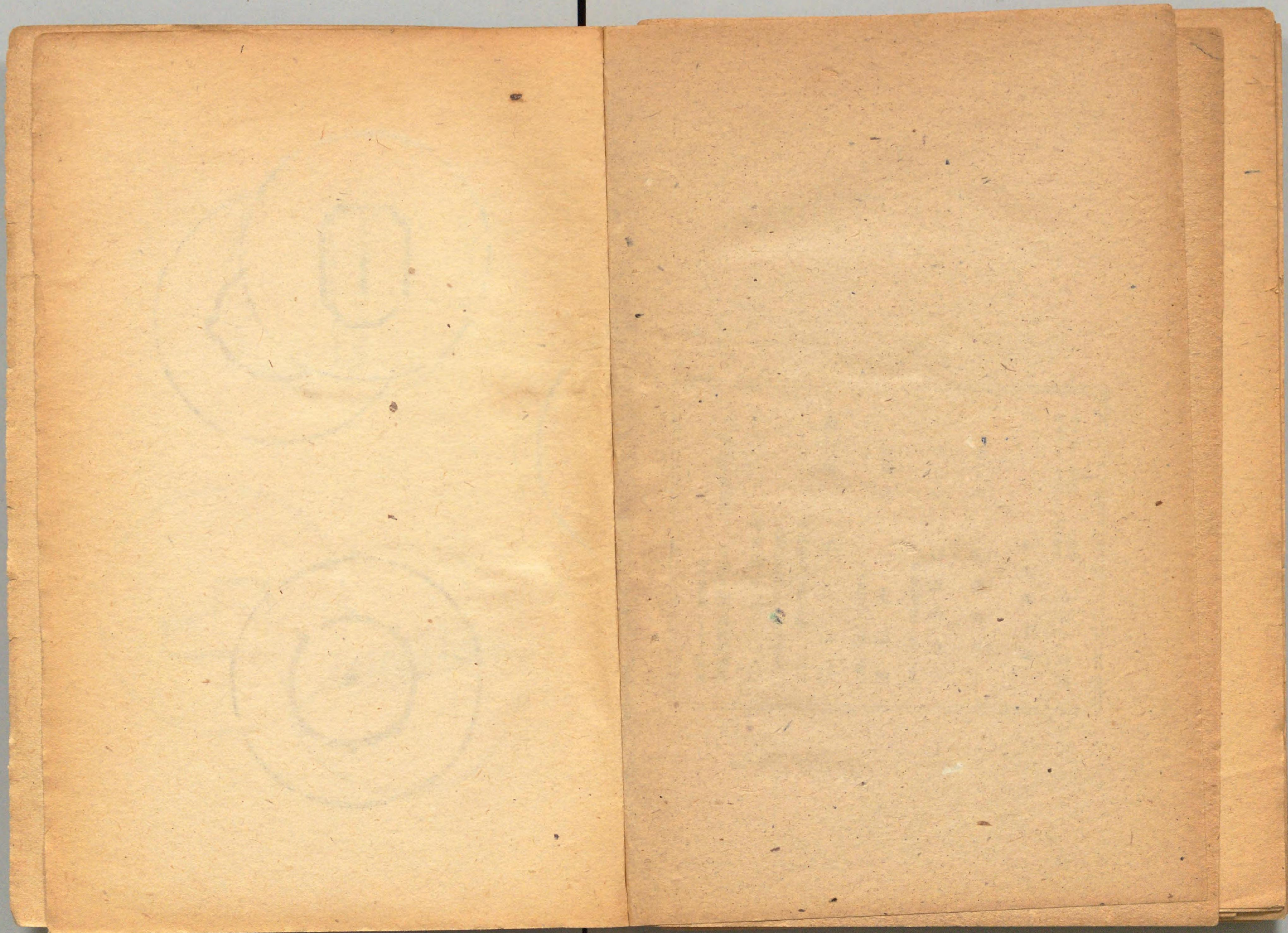
電話赤坂(48)三〇九〇

印刷・製本所

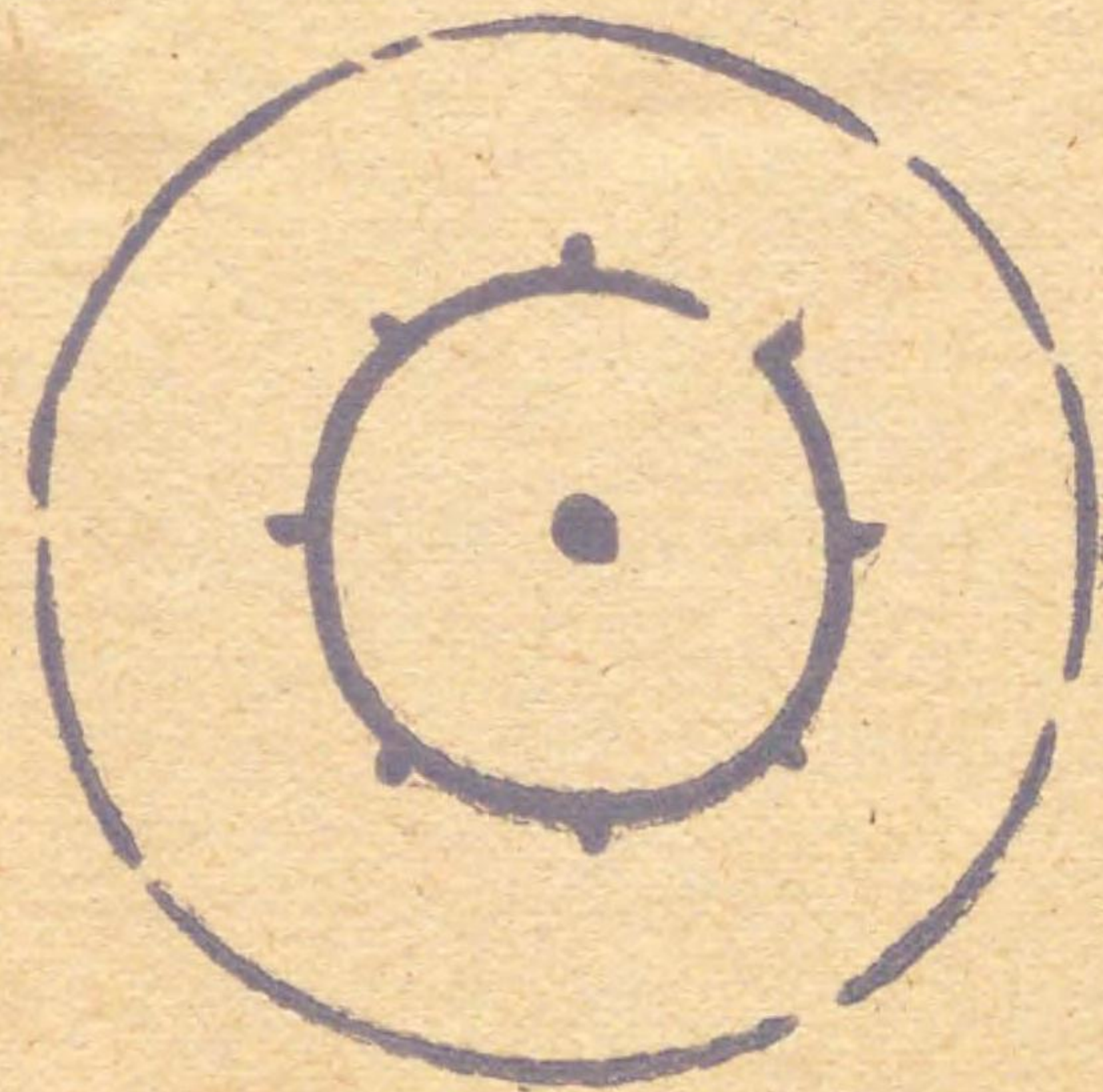
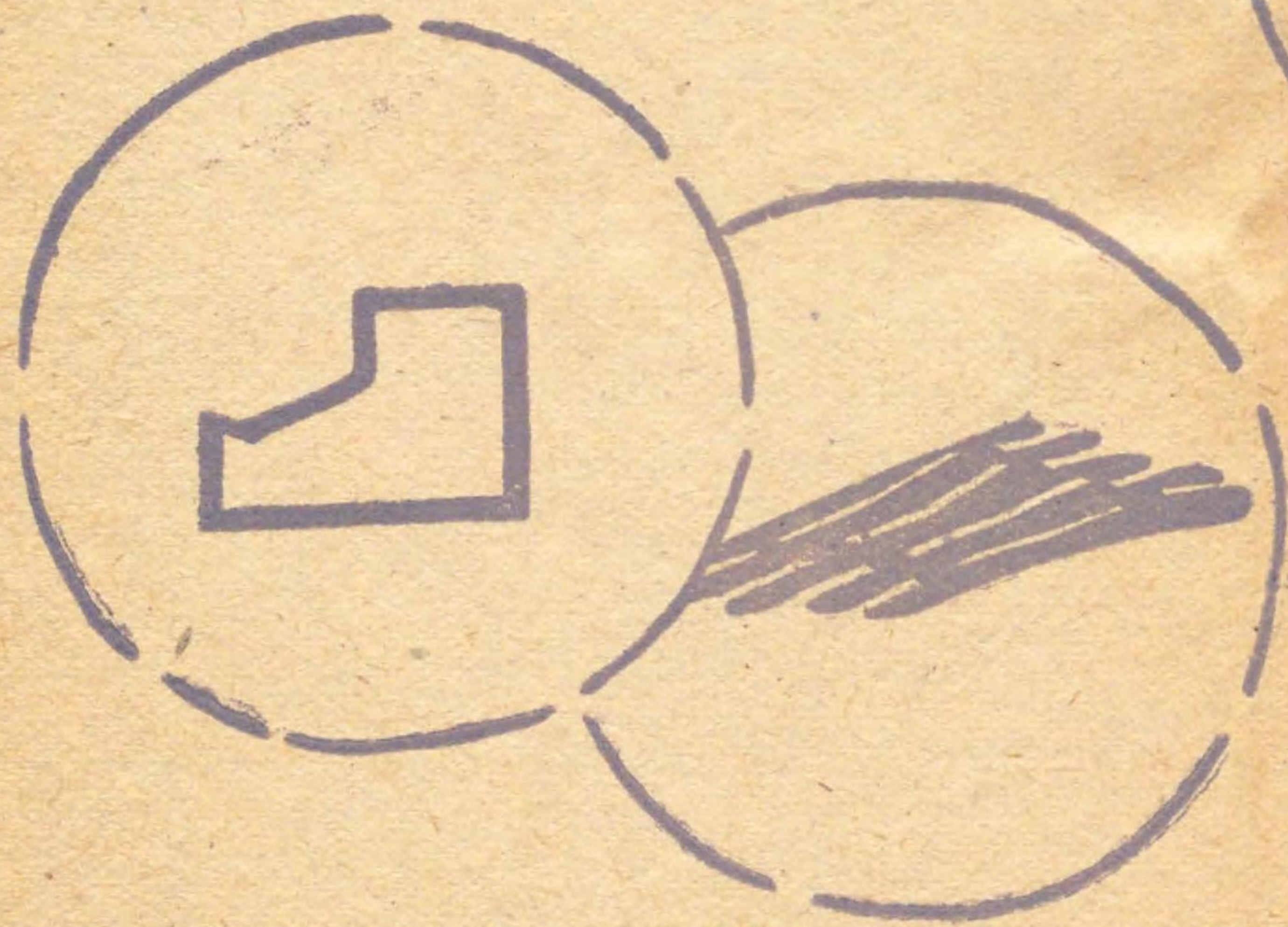
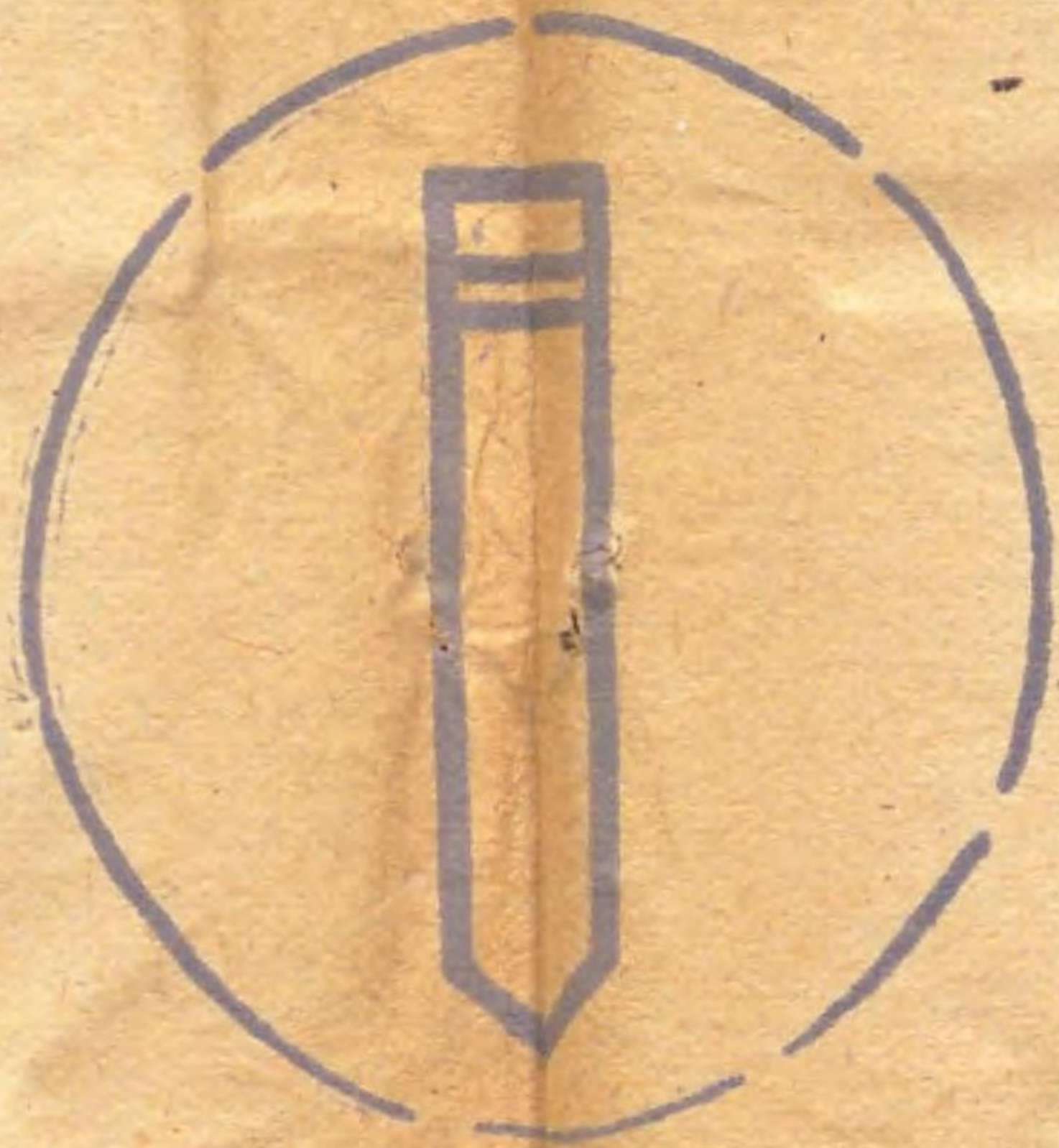
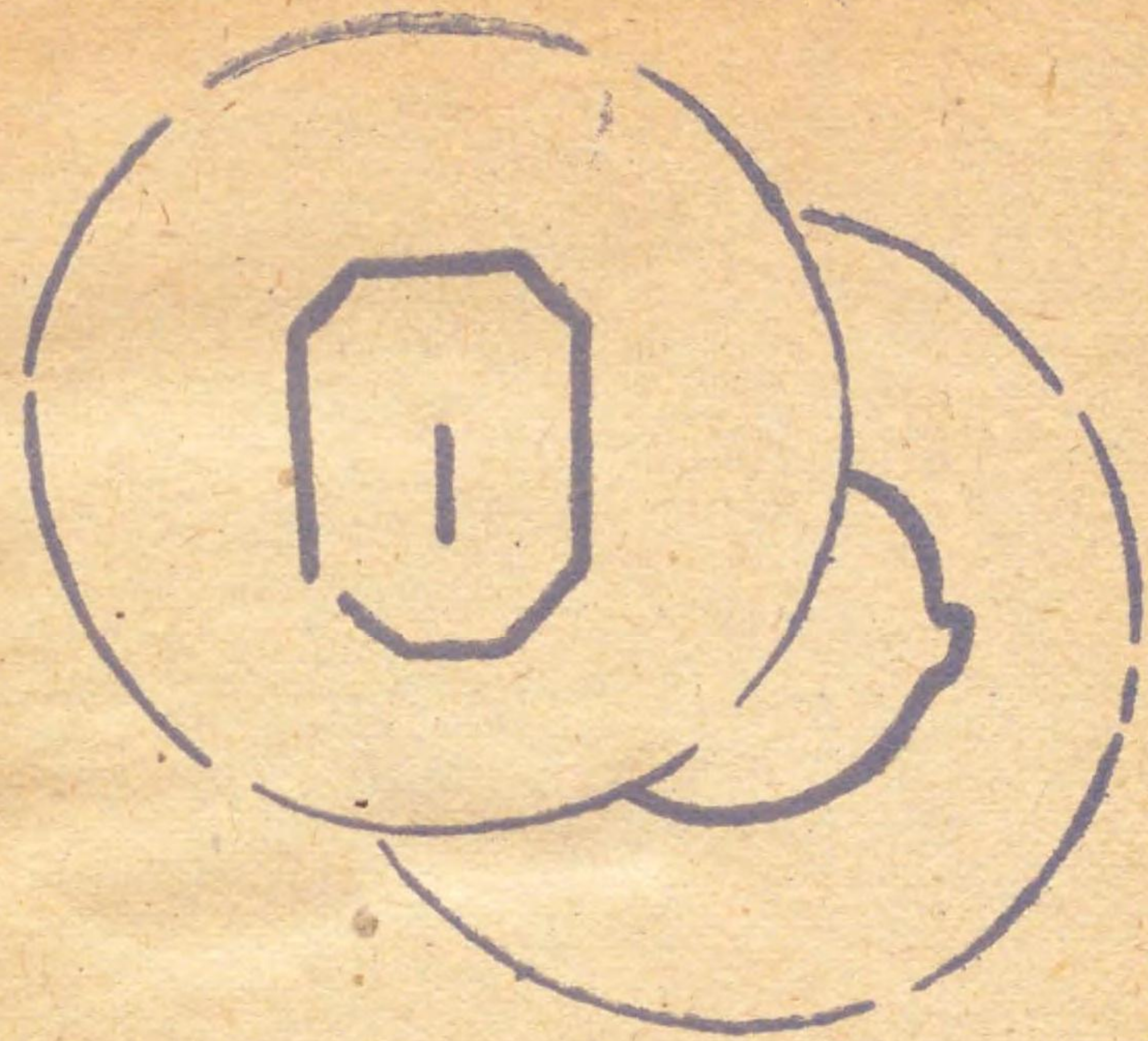
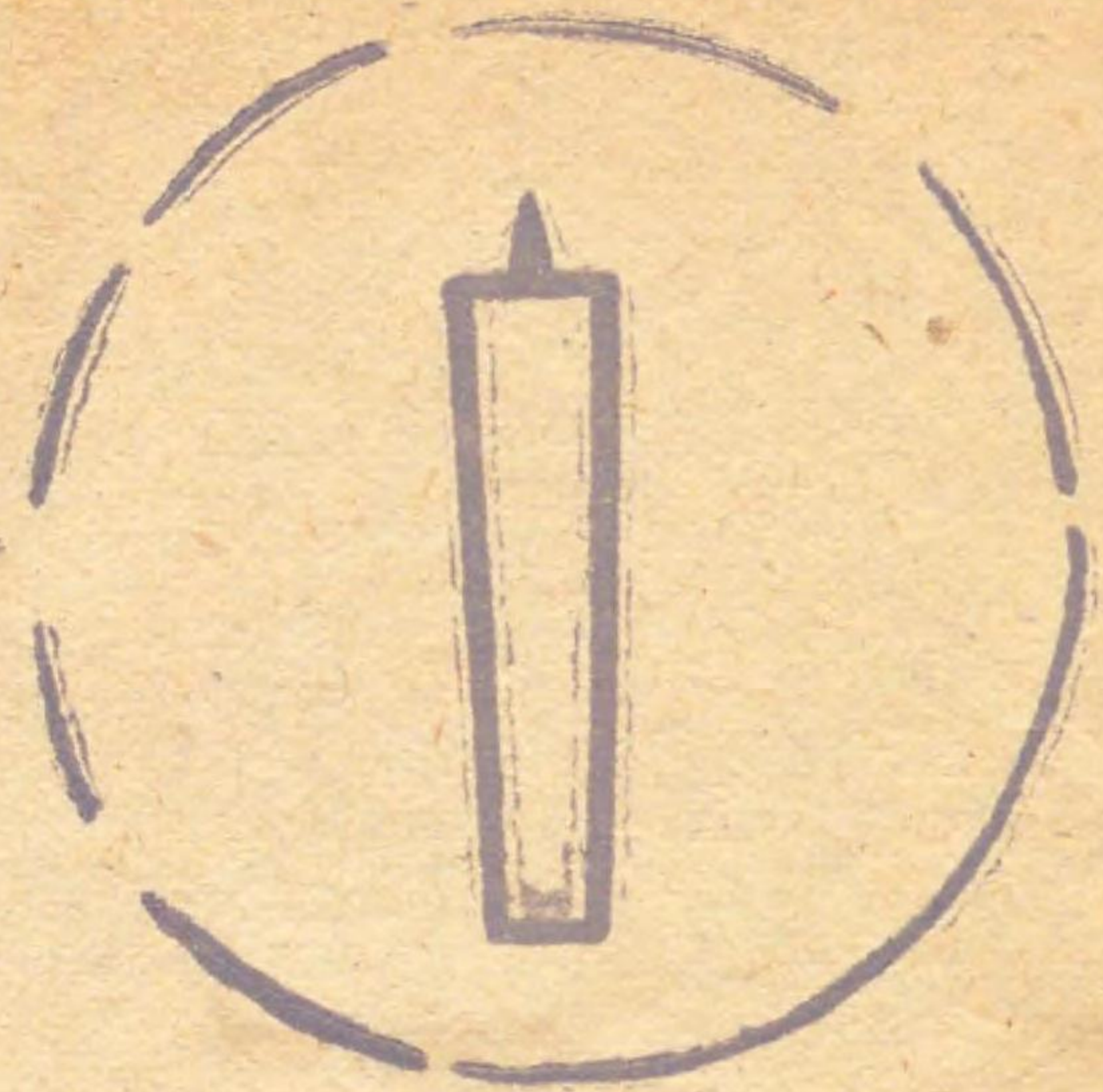
日本交通印刷株式會社

中央區築地一丁目十四番地













采花書房

定價 60 ㇵ